二　史　學　科

國史學第一・第二講座

本講座は明治四十年五月史學科開設と同時に設置され、内田銀藏教授が擔任、九月から同教授の國史概説および史學研究法の講義が開始された。やや遅れて三浦周行講師が來任し、「武家時代史」、および「古文書學」を講じた。内田教授は前年八月本學教授に任命されてから史學科の創設に參畫し、研究室の設置も教授の創意になり、その整備にもつとも力を注いだ。

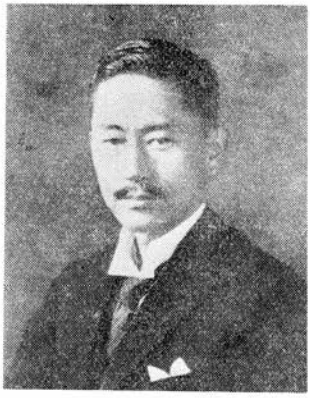
内田教授

内田教授の專門は日本經濟史・日本近世史であるが、また深く史學理論に留意したことは、明治四十三年四月創刊の『藝文』第一號以下に、數回にわたり掲載された「史學と哲學」なる論文がもつともよく物語つている。それは兩者の學問としての性質上の關係をとりあげて、精緻な分析を試み、歴史哲學・哲理的歴史・哲學史などの性質と、それらにおける諸問題を論じ、史學と哲學が相依り相助くべきを說いたもので、その精緻周到な學風を示すものである。また歴史研究のためには、廣く法學・經濟學などの知識の必要なことを認めとくに史學科學生のためこれら諸學の講義を設けたことがあつた。このような考えは、研究室創設の上にも働き、國史學關係圖書のほか、史學理論・經濟學・社會學などに關するものをも蒐め、それら圖書の分類、書架收藏法に

も新たな工夫をもつて特色を示した。なおその利用についてもとくに學生の出入を自由にし、研究室における學問研究によつて教官の學生に及ぼす感化を大ならしめるに意を用いたことは、學風樹立の上に與つて力があつた。

四十一年度の講義としては、内田教授は「國史通論」、「日本近世史」、「日本の國家及文明」とともに、史學研究法を受持ち、三浦講師は「日本中世史」、「日本制度史」、「古文書學」、および記録古文書講讀を擔當、この年から喜田貞吉講師は「日本古代史」および「日本歴史地理」を講じた。

ついで四十二年五月第二講座が設置され、同時に三浦講師が教授となつてこれを擔任した。三浦教授は四十年以來國史資料蒐集のことを委囑され講師となつていた。その專門は日本中世史・日本法制史であつたが、來任前は東京帝國大學史料編纂官として鎌倉時代史料の編纂に從事していた。教授は史料の蒐集をもつとも重視し、諸家・社寺所藏の記録文書の調査を行ない、その謄寫および原本の蒐集にとくに努力し、後年の古文書室の設置、および尨大な古文書原本蒐藏の基礎を築いた。その後も蒐藏は累年增加し、現在架藏の古文書は原本約二萬通三千點に達し、主なものには中院文書・平松文書・壬生文書・施樂院文書・東大寺文書・一乘院文書・淡輪文書・和蘭文書・吉田文書・狩野蒐集文書などがあり、影寫した古文書集は約六五〇部二四〇〇冊、近衞家文書・勸修寺家文書・離宮八幡宮文書・東大寺文書・仁和寺文書・神護寺文書・東寺百合文書・法隆寺文書などはその一例である。なおその年三浦教授、喜田講師はともに文學博士の學位を授與された。



三浦教授

四十二年度の講義の主なものは、内田教授の「日本經濟史」、「日本近世史」、「比較經濟史の諸問題」、「幕末維新史」、および史學研究法、三浦教授の「國史概論」、「日本中世史」、「古文書學概論」、および講讀・演習、喜田講

師の「日本古代史」、「日本歴史地理」などであつた。以後數年間、内田教授は「國史總論」を毎年擔當したほか、「日本經濟史」(明四三)、「日本近世史」(明四四—大二)、「近時日本の經濟發達」(明四五)、「日本社會史」(大二・三)および演習として「幕末維新外交史」(明四三)などを講じ、さらに史學研究法を四十四年まで受持つた。三浦教授は「國史概論」(大二)のほか、「日本民族史」(明四三)、「日本中世史」(明四三—大三)、「日本社會史」(大三)を講じ、演習としては「鎌倉時代」(明四三)、「日本法制史」(明四四)、「莊園の研究」(明四五)などを行ない、さらに毎年古文書學を講じた。喜田講師は毎年「日本古代史」、「國史地理」を講じ、今西龍講師は大正二年以後朝鮮史を擔當した。

四十三年夏、はじめて第一回卒業生七名および選科修了生一名を出したが、本講座專攻生は史學科を通じて最多數を占め、以後もこの傾向は持續している。同年十二月學生有志が三浦教授指導のもとに、史料講讀を目的として「讀史會」を創めたが、以來卒業生の增加に伴ない、その研究發表機關ともなり、毎年秋季には大會を行ない、公開講演會をも開き、また隨時見學旅行を試みて知見を廣めるなど學會としての活動を顯著に示すようになった。

大正四年九月には、本講座第一回の卒業生である西田直二郎が講師となつて「日本文化史」を講ずることとなつたが、この年度の他の講義は、内田教授は「國史總論」、「日本近世史」、および演習、喜田講師は「日本古代史」、「國史地理」であつた。大正五年からは内田教授は前年度講義のほかに、「日本經濟史」(大六)、「日本の開國」(大六)を、三浦教授は「公家と武家」(大六)、「貞永式目の研究」(大六)を、また西田講師は「平安朝文化史」(大五)、「日本文化史」(大六)をそれぞれ講じた。七年には國史概說を三分して、内田教授、三浦教授、喜田講師が、それぞれ近世・中世・古代を擔當し、内田教授は「貨幣の進化」を、三浦教授は「貞永式目の研究」、「古文書學」を、喜田講師は「國史地理」を、八年六月に就任した西田助教授は「日本文化史」を講じた。

しかるに八年七月内田教授は病のためにわかに逝去した。本講座の施設と陣容はこの時ほぼ前述のように整備されてはいたが、今後の發展には、教授の豐富な學殖と高邁な識見になお俟つところもつとも大なるものがあつたのである。教授の論著は西田助教授がおもに編輯し、『日本經濟史の研究』(大一〇)、『國史總論及日本近世史』(大一〇)、『史學研究法及史學理論』(大一〇)、『内田銀藏講論集』(大一〇)として刊行された。

内田教授逝去の後、第一講座は西田助教授、喜田講師が分擔した。大正九年七月には喜田講師が教授に任ぜられたが、教授は古代史に專念して、法隆寺再建を論じ、平城京條坊の制に關する精密な研究を遂げ、豐かな文獻學的知識と、廣域にわたる遺物遺蹟の調査の上に立つて、民俗・土俗および社會史的の研究を進め、その該博な知識によつて學生を指導した。西田助教授は同年五月史學研究のため在外研究を命ぜられ、一時講座分擔を解かれたが、十一年歸朝してふたたび分擔した。また三浦教授も十一年四月歐米に出張し、代つて中村直勝講師が古文書學を擔當した。この間における講義は、國史概說を三浦教授と喜田教授が中世・近世と古代を分擔、三浦教授は「貞永式目の研究」(大八)、「守護と大名」(大九)、「中世の都市」(大一〇)、「貞永式目追加の研究」(大一一)、「武家時代經濟史觀」(大一二)と、演習として「室町時代の神道と佛教」(大八)、「明治時代の信仰問題」(大九)、「近世社會政策」(大一〇)、「室町時代の庶民文化」(大一一)「近世國民思想の發達」(大一二)を講じ、また喜田教授は、「國史地理」(大九—一二)のほかに史籍解題および講讀(大九—一二)と、演習「平安時代の社會狀態」(大一一)などを行ない、西田助教授は十二年から「國史概說」、「古代文化の發達」、および「國史新著批判」を講じた。

喜田教授

なお文科大學叢書第四『滿濟准后日記』の刊行も、この期における業績で、それは明治四十三年末から着手され

ていたが、大正七年六月から九年十二月の間に三冊の刊行を完うしたのは、三浦教授、西田助教授らの努力によるもので、醍醐三寶院所藏の自筆册子本三十七册に帝國圖書館所藏の卷子本十一卷の校定を加えて刊行したものである。

大正十三年一月喜田教授は第一講座を擔任することとなつたが、間もなくその年九月退官して講師となつたため代つて同月西田助教授が教授に昇任、同講座を擔任し以後昭和二十一年の退官に及ぶのである。十三年度以降、國史概説は毎年三浦・西田兩教授が擔當、特殊講義は三浦教授が「武家時代の經濟史觀」(大一三)、「港灣の發達」(大一四・一五)、「黎明期の近世文明」(昭二・三)、「織豐時代の文化」(昭四)、「過渡期の文化」(昭五)を、西田教授が「京都の史的研究」(大一三)、「藤原時代の文化」(大一四)、「日本近世史の特殊問題」(大一五)、「古代の文化」(昭二—五)、「日本近世史の特殊問題」(昭六)をそれぞれ講じたほか、ともに諸種の主題を設けて演習を指導した。また中村講師はつづけて古文書概説を講じたが、昭和二年十一月第三高等學校教授となつて以後は、本學助教授を兼任することとなつた。なお今西龍助教授も大正十五年五月京城帝國大學教授となるとともに、兼ねて本學教授に任ぜられたが、昭和四年まで主として朝鮮古代史を講じた。その他、工學部天沼俊一教授による「日本建築史」(大一四)、藤井甚太郎講師の「明治維新史」(大一四—昭二・六)、大塚武松講師の「日歐外交史」(昭四・五)、山田文昭講師の「日本佛教史」(昭三)などが行われ、六年度からは新たに藤直幹講師が「中世史料研究」、および三品彰英講師が「古代日鮮關係史」の講題をかかげて講義を始めた。

なお大正十四年秋の專攻二回生を中心とした東京鎌倉地方見學旅行を最初として、その後毎年各地の史蹟社寺を見學することが恒例となり、遠くは北海道・朝鮮・滿洲・琉球にも及んだことがあり、この風はなお現在春秋二回の見學旅行として續けられている。また昭和二年十二月には西田教授指導のもとに「民俗談話會」が有志の間で組織されたが、これは同年度に教授が特殊講義として日本古代文化を講じたことが契機となり、民俗學的方法によつ

て古代史研究に新分野を開拓しようとしたもので、實地調査と研究發表を行なつた。さらに大正末年から盛んとなつた明治史研究の風潮に伴ない、昭和三年二月三浦教授指導のもとに「明治史研究會」が成立、會員の研究發表とともに、實歴者の談話を聴取する試みもなされた。この間讀史會も順調な活動をつづけ、昭和五年十一月にはその創立一十年を迎え、二十周年史を編纂、また會員の醵金を本學に寄附して本講座の研究補助に充當することとした。

このように本講座が發展をつづけるとき、三浦教授は昭和六年七月に停年退官、名譽教授となつたが、その直後九月逝去した。三浦教授が在任中もつとも力を盡したのは、古文書の蒐集であつたが、その中から精品を選んで玻璃版に附し、八年三月文科大學叢書第九册として出版された。教授には、その多くの論文を收載した『法制史之研究』(大八)、『續法制史の研究』(大一四)、『日本史の研究』(大一一・昭五)などのほか編著多く、その專門とした日本法制史・日本中世史のみでなく、各時代各方面の問題にわたつて、史料を自在に驅使し、考證精緻、論斷明晰、よくその核心に迫つた。

專攻學生の數は大正末期から急激に增加し、大正十五年本講座專攻學生定員が一〇名と定められて以後、しばらくはなおこの數に滿たなかつたが、昭和五年卒業生は一躍二四名に達し、以後も毎年定數を超過する盛況を示した。すなわち明治四十三年の第一回卒業生から大正十五年度まで、計一七回四一名であるに對し、昭和二年から六年度までの卒業生は計五回五二名であつた。

この期の卒業論文についてみると、明治大正期には政治・政策・制度に關するものが比較的多く、社會經濟に關するものもあるが、それも法令・制度を主題に論じ、また佛教・學問を取り扱つたものも多くは個人について考え制度面をとりあげている。昭和に入ると社會史的および精神史的研究が顯著となる。前者は武士・庶民の生活乃至は階級の成立、氏族制度、封建制度などを取り扱い、後者は多く時代精神を論じ、また特定の歴史事象、とくに武士町人などの社會の背景、あるいは性格を精神史的に考えたものもある。他に商業・貨幣など經濟史に關するものも

見える。

三浦教授退官後は、長く第二講座擔任教授を缺くことゝなり、第一講座の西田教授がもつぱら學生の指導に任じ、文化史的研究の風が顯著となつた。教授の立場は昭和七年公刊された『日本文化史序說』によく示されているが、それは最初に文化史研究の性質および發達を論じて、文化史學の立場を明らかにした上、後篇で各時代における日本文化の展開を具體的に考察したもので、教授の代表的著作となつた。

昭和七年以後約十年間の講義を概觀すると、國史概說は、第一部を西田教授が、第二部は七年度は辻善之助講師が擔當したが、翌年度からは中村助教授が毎年相並んで講じた。西田教授は他に特殊講義として、「文化史の方法及び問題」(昭七・八)、「近世文化と都市生活」(昭八・九)、「日本近世文化と神道思想」(昭一〇)、「日本近世文化」(昭一〇—一三)、「京都の文化史的研究」(昭一四)、「日本文化史の諸問題」(昭一五・一七)、「日本古代史の特殊問題」(昭一六)などを講ずるかたわら、演習は主として思想史・文化史・精神史の諸問題を中心に指導した。また中村助教授はつづけて古文書學を擔當した。その他法學部牧健二教授は七年度から日本法制史に關する講義を擔當し、「日本法制史」(昭七・一〇・一二)、「日本法制史の基本問題」(昭八)、「日本封建社會と法制」(昭一三)、「日本固有法の精神」(昭一五)などを講じた。喜田講師は引きつづき、「日本歴史地理」(昭七・八)、「蝦夷の研究」(昭九)、「古代史の特殊問題」(昭一〇・一二・一三)、「日本先住民族の研究」(昭一一)などを講じたが、十四年逝去した。なお六年度から講師となり、「鎌倉時代史」(昭八・九)、「中世初期の社會」(昭一〇)などを講じて來た藤直幹講師は十一年三月助教授となり、ついで「武家社會の研究」(昭一一)以下、毎年主として中世武家社會の思想を中心に講じた。

その他辻講師は九年度にも來講して、「日本佛教と政治との關係」を說いたが、これは八年度の黑板勝美講師の「奈良時代史」(昭八)、「日本古文書樣式の研究」(昭一〇)、池內宏講師の「南鮮上代史の研究」(昭八)などとともに、東西兩大學の教官の講義を同時に聽講する機會を學生に與えたものとして注目される。

また昭和八年度からは京都府神職會の寄附による神道史の講義が開始され、宮地直一講師が十八年まで「日本神祇史」を講じた。なお神道史關係の講義としては出雲路通次郎講師の「有職故實」（昭九―一一）、「祭祀の研究」（昭一二）、「有職故實と時代」（昭一三）、原田敏明講師の「日本古代宗教」（昭九）、宇野圓空講師の「神道研究」（昭一一）、柳田國男講師の「民間信仰と慣習」（昭一二）、赤松智城講師の「神事の研究」（昭一三）、清原貞雄講師の「日本神道史」（昭一四）、折口信夫講師の「神道と民間信仰」（昭一四）が行われた。これらの開講を機として、「神道史研究會」が組織され、しばしば公開講演會を催し、研究室の開放に際しては、各方面から神道關係史料の出陳を請い、綜合的展觀を行なうことまた數度に及んだ。

また藤井甚太郎講師は引きつづきほぼ隔年に明治維新史を講じて十七年度に及び、魚澄惣五郎講師は九年以後、「室町時代初期の特殊問題」（昭九）、「室町幕府と諸家族」（昭一一）、「室町時代の政治と社會」（昭一三）などつづけておもに室町時代史を講じ、牧野信之助講師は「室町季世史」（昭八）、「中世後期の經濟生活」（昭一〇）、「桃山時代の土地制度及び村落」（昭一二）、「近世拓殖史」（昭一四）を講じて來たが惜しくも十四年九月逝去した。さらに三品彰英講師も十一年以降隔年に來講して朝鮮史を受け持ち、柴田實講師は十一年以降、毎年近世史料講讀、および神道史などを講じ、また東伏見邦英講師は十四年度以降、主として飛鳥奈良時代の文化について講じた。なお吉田三郎講師も來講し、「日本近世の思想」（昭一六）などを講じた。

昭和十六年に勃發した太平洋戰爭によつて、在學年限が臨時短縮され、また戰爭が苛烈化するとともに、學徒動員が行われるなどのことが起つて、十九・二十年度は、ほとんど實際上教室の機能が停止するに至つた。この間の講義としては、國史概說を西田教授、中村助教授が分擔、特殊講義としては、藤助教授の「中世の社會」（昭一七）、「武家社會の家族」（昭一八）、「武家儀禮の研究」（昭一九）、「中世の社會文化」（昭二〇）、柴田講師の「神道史の諸問題」（昭一七）、「國學史の諸問題」（昭一八後）、「近世精神史の諸問題」（昭一九）、「近世の社會とその思想」（昭

二〇)、東伏見講師の「奈良時代の文化」(昭一八・二〇)、「續日本紀研究講讀」(昭一九)、魚澄講師の「室町時代の政治及び社會」(昭一八)、吉田講師の「日本近世史の特殊問題」(昭一七)、「近世の思想」(昭一八)、藤井講師の「明治維新史」(昭一七)などが行われ、新たに赤松俊秀講師の「中世史料の研究」(昭二〇)が加えられ、その他西田教授は演習、藤助教授は實習、中村助教授は古文書學をつづけた。

かくて昭和二十年八月の終戰を迎えて、戰時中の臨時措置は廢止され、翌年五月の新學年からは舊に復して講義が開始された。國史概說は西田教授が擔當、新たに稱呼の變つた研究としては、中村助教授「古文書學概論」、藤助教授「日本社會史の研究」、柴田講師「日本封建制度の研究」、東伏見講師「上代文化史の諸問題」、赤松講師「中世經濟史料」が設けられ、また演習は西田教授が「文化史と民族學」、藤助教授が「日本近世史學史の諸問題」を主題に指導することとなつた。

このようにして本講座が本來の姿に立戻り、研究室の活動もふたたびその緒につこうとしたとき、學年中途の二十一年七月西田教授が突然「學部の歷史」に述べられたような事情によつて退官するという事態が生じた。西田教授は三浦教授退官後、本講座ただ一人の教授として教室を主宰指導して來たのであるから、この突然の退官は本講座に收拾し難いほどの困惑を與えたのも當然であつた。そこで西洋史學の原隨園教授が本講座を代表し、考古學の梅原末治教授も力を添えて、再建をはかることとなつた。そして、八月柴田講師は助教授に任ぜられるとともに、「近世封建制度の研究」を演習として行ない、新たに「平安京の研究」を講じ、また平山敏治郎助手は講師に轉じて「文化史と民族學」を講ずることとなつた。

二十二年度からは藤、柴田兩助教授がこもごも講義を擔當し、研究として、梅原教授の「日本古代の文化」(昭二二・二三)、柴田助教授の「近世日本とヨーロッパ文化」(昭二二・二三)、「古文書學入門」(昭二三)、東伏見講師の「上代文化の諸樣相」(昭二二)、三品講師の「日本古代史の諸問題」(昭二三)、「朝鮮史通論」(昭二三)、平山講師の

「傳承文化論」（昭二二）が開かれ、新しく小葉田淳講師の「近世社會經濟史の諸問題」（昭二二）、淺野清講師の「法隆寺建築の研究」（昭二二）が加わつた。演習には原教授が「讀史概觀」（昭二二）、「西洋史學史潮」（昭二三）のほか柴田助教授は「日本に於ける社會結合の諸問題」（昭二二）、「近代精神の諸問題」（昭二三）、藤助教授の「外國文化受容の史的研究」（昭二二）、「日本文化の類型」（昭二三）、三品講師の「漢籍倭人傳の研究」（昭二三）などが行われた。

昭和二十三年一月、中村助教授が西田教授についで、第三高等學校教授を退くと同時に、本學より去つたことは、本講座の教授陣容をさらに寂しくした。同助教授は長く古文書學を擔當し、昭和八年からは國史概說第二部を講じ、三浦教授の後をうけて史料蒐集に寄與するところ多く、その代表的著作『莊園の研究』（昭一四）などのほか論著もすこぶる多い。また二十三年十月には、藤助教授が大阪大學教授に轉出することとなり、本講座は創設以來かつて見なかつたほどの教官の變動を生じ、再組織の必要に迫られた。

二十四年度の講義は、柴田助教授が概說と研究「民俗信仰の歷史的發展」、および演習を擔當、他に赤松講師の「愚管抄の研究」、小葉田講師の「商業史の研究」と、新たに西岡虎之助講師の「莊園を中心とした社會經濟史の諸問題」、および演習として三品講師の「日本古代史の諸問題」が加えられた。そしてこの年十一月に至り、小葉田講師は東京文理科大學教授から轉じて本第一講座を擔任することとなつた。教授は本學卒業後、昭和五年から終戰まで臺北帝國大學にあつて、『日本貨幣流通史』（昭五）のほか、日華關係をはじめ、對外交涉史に關する論著を發表し、二十二年東京文理大に轉じたものであつた。

二十五年度からは、小葉田教授が國史概說を擔當し、この年は新たに時野谷勝講師の「幕末史の諸問題」、家永三郎講師の「日本思想史研究」、横田健一講師の「律令國家の形成」が行われ、他に柴田助教授、赤松講師がこれを助けた。柴田助教授はその年四月教養部教授となつて轉出したが、講義はそのまま擔當した。

二十六年度からは、學部では研究・演習のみ行われるようになつたが、この年は新たに人文科學研究所坂田吉雄助教授の「天皇制國家觀の成立」、岩生成一講師の「御朱印船貿易史」と、大間知篤三講師の「日本民俗學研究」の講義が開かれた。最後のものは戰前から新興の學問分野として重視されて來た民俗學に對する措置で、その後も柴田教授により民俗學に關する講義が、隔年、あるいは毎年開かれている。なおこの年八月赤松講師は京都府教育委員會文化財保護課長から本學助教授に來任した。

二十七、八年度には研究として小葉田教授の「近世社會經濟史研究」(昭二七)、「中世對外交渉史」(昭二八)、柴田教授の「民間傳承論」(昭二七)、赤松助教授の「中世莊園の構造」(昭二七・二八)、三品講師の「古代文化の諸問題」(昭二七)があつたほか、新たに林屋辰三郎講師の「封建社會成立史の研究」(昭二七・二八)と石田一良講師の「近世文化史の諸問題」(昭二七)、「近代文化の展開」(昭二八)が加わつたが、兩講師はこの年以來引きつづき講義を擔當している。

二十八年十月赤松助教授は教授に昇任し、本第二講座を擔任することとなり、ここに昭和六年三浦教授退官以後はじめて兩講座に教授が揃うこととなつた。赤松教授は長く京都府下の國寶調査に從い、古文化財に關する造詣深く、ことに古文書古記錄に精通し、その方面に關するもののほかに、古代中世の土地制度・商業などにつき論考を發表している。

顧みると、本講座創設の明治末期から大正初期にかけては、まだ政權中心の時代史が支配的な史潮をなしていた。この間にあつて內田、三浦兩教授は、精緻にして博洽なそれぞれ獨自の新史風をもつて研究成果をあげ、學生を指導した。內田教授は、日本經濟史學の開拓者とも目される人であるが、史學理論にも深い考察を拂い、精到にして組織的な史論の構成は、當代の國史學者の中にあつてことに卓越していた。三浦教授はもつとも史料に精通し、その論考は精緻にして的確なるをもつて聞えたが、教授の取りあげた問題はほとんど國史の全分野にわたり、法制史

はもとより、特に社會史・經濟史の方面においても先驅者たるの地位を占めている。もとより精緻にして博洽な學風は、ひとり本講座のみならず、當時の本學史學科に共通のものであつたが、西田教授はこのような史風をうけ、とくに歷史理論について深く考察を進め、これを國史研究の上に具現しようとした。わが國の國史學研究は大正中期から從來の時代史に代り、文化史の史風が大いに興つたが、その多くは文化に關する歷史記述の分量的比重を一般史の中にあつて重くする意味のものであつた。西田教授は、それと質を異にし、歷史方法論として文化史の立場を樹立し、國史一般を文化史的立場において把握しようとした。前記『日本文化史序說』はこの意味において劃期的な著述であつた。

昭和六年三浦教授退官以來、本講座においては、とくに文化史研究が顯著となり、前述のように昭和八年から神道史の講義が開始され、十五年には本學部に日本精神史講座が開設され、西田教授がこれを兼擔した。七年度から二十年度までの專攻卒業生は一一五名に上るが、それらの卒業論文題目をみても、文化史・精神史を主題にしたものがいよいよ增加する傾向にあり、時代や階級などを精神史的に考述するもののほかに、思想・宗教・學問に關するものがかなり多い。しかし社會・經濟に關するものも少なくはなかつた。

戰局の進展につれて、國家主義が强調され、精神總動員から思想統制にまで進んだ。國史學がこのような時局下にその一翼として精神運動に參加し、あるいは參與させられたもののあつたのは事實である。本講座の史風の傳統の一部面は文化史・精神史研究として見事に開花したが、それは決して超國家主義的・超論理的のものでは決してない。しかし精神史乃至神祇・思想などの取扱いは時局の進展の强壓下にあつては、そのような非學問的なものに結合しようとする危險をより多く內藏していたといえよう。

戰後國史研究の風潮は一般に著しく變容した。國家主義のもとに制約をうけた研究分野が解放され、古代史や近代史においてその成果がもつとも端的に現われている。一般的にいつて觀念論的なものから、實踐的具體的な史風

への轉移が見られ、とくに社會經濟史研究の流行がある。卒業論文にもそのような傾向が顯著である。しかし宗教・文學・藝能・思想などについての論文が、はなはだしく減少したわけではない。ただそれらの問題の取り扱い方は文化史の問題としてでなく、社會經濟史的基盤において把握しようとしている。國史學においても、唯物史觀・階級史觀の影響を大なり小なり受けるものの多いことは認めなければならないが、本講座創設以來の學問の傳統は、依然として新時代に卽して強く生きている。一言にしていえば、それは歷史理論についての廣汎な理解の尊重と、國史の諸領域に立つて深く究めなければならぬとする態度である。

昭和二十年終戰直後の窮乏の中に、早くも同年十一月讀史會大會を大德寺山內龍光院・芳春院で開催し、翌月奈良方面に見學を實施した。そして二十三年からは春季の國史學會大會、秋季の讀史會大會が定期に開催されたがその內容は從前のように大學院學生の研究發表をもつて充當した。そして秋季大會はこの年から十一月初旬開催の史學研究會大會の一環として開く例となり、見學旅行も春秋二季實施し、とくに秋は二・三泊で山陽・山陰・北陸・東海・四國の各地に及んでいる。

二十八年度からは大學院文學研究科が開設され、國史學專攻として五名の入學者があつた。その年以後現在まで研究として、小葉田教授の「漁業及漁村の史的研究」(昭二九・三〇)、赤松教授の「農村史の研究」(昭二九)、「中世莊園の動向」(昭三〇)、「平安時代の社會と經濟」(昭三一)、柴田教授の「神道史の研究」(昭二八)、「日本民俗學研究」(昭二九)、三品講師の「古代文化の展開」(昭二八)、「古代資料の史的再構成」(昭二九)などがそのために開かれ、演習は小葉田、赤松兩教授が指導している。

また二十九年度以降の學部の講義としては、三十年度から昔にかえつて概說を講座擔任教授が講ずることとなり、小葉田教授が「國史學序說」を講じたほか、研究・演習は小葉田、赤松兩教授を中心に、これに柴田教授、三品、林屋、石田各講師が加わつて續けられているが、本年度は新たに梅溪昇講師が「明治政治史の研究」を講じ、

教養部岸俊男助教授が講讀を擔當している。

東洋史學第一・第二・第三講座

本文科大學の創設は、明治三十九年、すなわち日露戰爭の翌年に當り、國民の關心が大きくアジア全體に向けられていた時で、本學がその創設期からとくに東洋學研究を重視しようとしたのは、全く當を得たものであつたが、本第一講座も右の東洋學重視の風潮を背景として、明治四十年五月に開かれ、續いて第二講座は四十一年五月、第三講座は四十二年五月に設置され、三講座制をもつて今日まで發展して來た。

内藤教授

まず明治四十年十月内藤虎次郎が操觚界から本學講師として迎えられて第一講座を擔任、四十二年九月教授に就任した。また四十一年九月には富岡謙藏が講師となり、翌年四月文部省留學生として清國から歸國した東京高等師範學校桑原隲藏教授が、本學教授に任ぜられ第二講座を擔任、同年九月、さらに羽田亨が講師となつて、以上の二教授二講師の陣容で本講座の基礎は確立し、大正期に入るまで、この教官組織で創業の重任に當つた。

このころ、普通講義の東洋史概說は内藤、桑原教授が擔當し、内藤教授は主に中國近世史・朝鮮史を、桑原教授は古代・中世東洋史を講じた。特殊講義は、内藤教授が「清朝史」(明四三―四五)、「東洋近世史」(明四三)、桑原教授が「東西交通史」(明四二―四四)、「唐代東西交通史」(明四五)を主題とし、演習題目は、前者が「禮部志稿研究」(明四五)、後者は「漢書西域傳研究」(明四五)であり、富岡講師は宋

朝史および中國金石文、羽田講師は西域史をテーマとして毎年講じた。當時內藤教授の豐かな學識は海內に聞え、桑原教授の學風もまた精緻を極め、きわだつた特色を發揮していた。加えて羽田講師の新進學徒としての西域史研究は、わが國東洋史學界に全く新しい分野を開いたもので、內藤教授の近世史研究、桑原教授の東西交涉史と相並んで、それぞれ後進に大きい道を開き、本講座の支柱となつた。

明治末期には、中國西部および中央アジア地方に對する學術調査が歐洲學者によつてしきりに行われ、多くの新史料が發見されたが、わが國から派遣された大谷光瑞學術調査隊も、四十三年二月貴重な東洋學研究資料を將來し、本學教官は西本願寺に赴いてこれを調査した。ついで同年秋には內藤教授と富岡講師が、狩野直喜教授、小川琢治教授、濱田耕作講師とともに清國に出張し、ペリオ教授らによつて發見されたいわゆる敦煌文書の調査に當り、翌年にはその調査報告講演會を開いて、將來した圖書・寫眞を展觀、東洋學研究に大きな貢獻をなした。これに引き續いて四十五年三月內藤教授、富岡、羽田兩講師は滿洲奉天に出張し、清の故宮に藏された貴重文書を調査し、二か月の後「滿文老檔」・「五體清文鑑」を寫眞として、また「禮部志稿」を影寫して將來した。これらは內藤教授の講義・演習に活用されたほか、內藤教授指導のもとに鴛淵一、また羽田教授指導のもとに三田村泰助、今西春秋らが研究に當り、それぞれすぐれた業績を殘すこととなつた。

桑原教授

またこのころ創設された「支那學會」・「史學研究會」・「京都文學會」でも前記本講座關係教官はそれぞれ研究成果を發表活躍したが、四十一年文科大學叢書の刊行が企てられるや、羽田講師は二か年にわたる苦心の末、諸家祕藏の古寫本舊槧本二十種を校勘した『大唐西域記』を同叢書の第一册として公刊した。なお四十五年七月、支那文

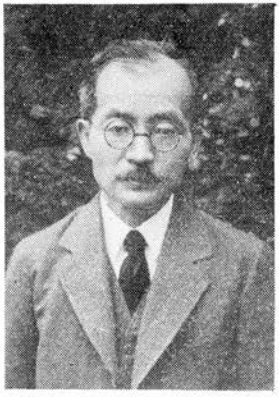
學の狩野直喜教授が學術調査のため清國および歐米各國に出張した際には、桑原教授が先秦時代の儒教の講義を、內藤教授が尙書の演習を兼擔したが、このことはそれら教官の豐かな廣い學識を示すとともに、當時の東洋學においては哲・史・文三科が相互不可分の性質を備えていたことを語り、いわゆる支那學と總稱される學風を表わしている。前記支那學會の存在はその研究面での反映であるが、また研究設備の上でも、當時支那哲學・支那文學・東洋史學は研究室を一つにし、資料・漢洋書籍・標本類もすべて三科關係のものを一所に藏していたのである。

このような本講座教授陣の充實に比し、學生の數は少なく、明治四十年の第一回入學生は本科・選科各一名で、大正十一年に至るまでこの數はほぼ變らなかつた。この期の卒業論文の傾向としては、清代中國と西洋諸國との通商關係、明代南洋交通史など、交涉史的な色彩が顯著であつたのは桑原教授の影響によるものであろう。

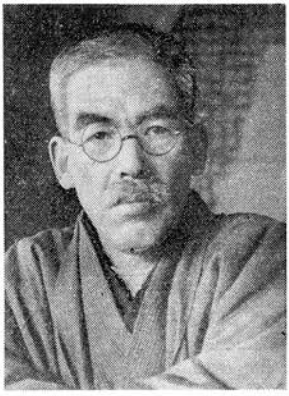
ついで大正期に入ると、まず元年九月矢野仁一助教授が新たに來任、二年二月には今西龍が講師となり、つづいて五年一月助教授に任ぜられた。羽田講師も二年四月助教授となつたが、創設以來その任にあつた富岡講師は七年十二月惜しまれつつ逝去した。また羽田助教授は三年六月から十一月までペテルブルグに出張、ラドロフとウィグル文獻の共同研究に當り、矢野助教授は六年八月から二か年米國に留學、八年七月には、ふたたび羽田助教授がウラルノルタイ語研究のため二か年間米・英・佛三國に留學を命ぜられて出發した。

いまこの間を中心に三講座制の完備する大正九年までの講義についてみると、まず普通講義、東洋史概說は、前代と同樣、內藤教授が近世史を、桑原教授が上古・中世史を擔當した。特殊講義は、桑原教授が「唐宋時代東西交通」（大二・三）、「唐宋時代の廣東貿易」（大四・五）、「唐宋時代の支那貿易港」（大八）、「アラブ人の記錄に見えたる支那記事」（大七）を、內藤教授が「入關期の清朝史」（大二）、「滿洲開發史」（大三）、「清朝の史學」（大四）、「曾國藩」（大五）、「乾隆嘉慶期の文化」（大七）などを講じ、また矢野助教授は「支那近世の外國關係」（大二・三）、「近世支那基督教史」（大二）、「露清關係」（大四・五）などもつぱら中國中心の外交史を、羽田助教授は「古代西域史」（大二・

三)、「土耳古民族史」(大五・六)、「蒙古史」(大八) を講じた。また大正二・三年には河合弘講師の朝鮮書籍に關する講義があり、五年以後は今西助教授の朝鮮史を加えた。演習としては、内藤教授の「元明清時代公牘」(大二―五)、桑原教授の「後漢書西域傳」(大二)、「歴代史略」(大三) が行われたが、四年から六年までは專攻生なく中止された。



矢野教授



今西教授

一般にこの期に入ると、さきに述べた支那學的綜合の學風が、次第に哲・史・文三科獨立の傾向を示し、本講座も史學的精彩を發揮するようになつた。こうした學風の分化發展に應じて、大正三年四月文科大學陳列館が新築されると、本研究室は分離してその階下西南隅に移轉することとなつた。また學生は數の上でこそ毎年一、二名に過ぎなかつたが、その卒業論文は時代・内容とも頗る多彩になつて來ており、本講座の一層の充實を物語るものとして注目されよう。

さて大正八年九月米國留學を終えて歸朝した矢野助教授は、翌年二月教授に任ぜられて第三講座を擔當し、ここに三講座制の實を備えるようになつた。ついで十一年二月、今西助教授は朝鮮史研究のため二年間中國および英國に留學、十五年五月には京城帝國大學教授となり、兼ねて本學教授に任ぜられた。またこの間、十三年四月羽田助教授は教授となり以來十五年八月に内藤教授が停年退官するまで、内藤教授は第一講座を、桑原教授は第二講座を擔任、矢野教授は第三講座と史學地理學第一講座、羽田教授は第三講座をそれぞれ分擔、おのおの專門深奥な研究分野をもつて四教授が並び立つという、前後に例をみない充實さを示すこととなつた。

この間、東洋史概説は、はじめは内藤、桑原兩教授が受け持つたが、十年以後は矢野教授が主に近世を擔當し、また後には羽田教授が加わることもあつて種種な形で續けられた。また、大正後期には各教官獨自の研究が深化を示し、特殊講義にもそれが反映した。すなわち、内藤教授は「支那史學史」（大八―一〇）、「支那の繪畫」（大一一・一二）、「滿洲開國時代の研究」（大一三）、「清朝の史學」（大一四）、「支那の目錄學」（大一五）を、桑原教授は「唐律研究」（大八・一三）、「唐律を中心とする支那の法律」（大一五）、「支那に關するアラブ人の記錄」（大九・一二）、「支那人の風俗に關する研究」（大一〇）、「歴史上より見たる南北支那」（大一四）を、矢野教授は「近世支那史」（大九）、「支那近世の外國關係」（大九・一〇・一二）、「支那史外國資料」（大一一）、「英支外交關係」（大一三）、「最近支那外交史」（大一四）を、羽田教授は「蒙古史」（大八・一五）、「西域史」（大一一）、「西方諸宗教東漸史」（大一二）、「中央亞細亞出土文獻解説」（大一三・一四）などを講じ、演習では、内藤教授の「元代公牘」（大八）、「敦煌古書」（大一四）、「支那古代史料」（大一五）、桑原教授の「支那敍里亞交通に關する史籍」（大八）、「漢書西域傳」（大八・九）、「日知錄」（大一三）、矢野教授の「支那の對外關係」（大一〇―一二）、「支那關係外交條約文」（大一三・一四）、羽田教授の「東洋史の諸問題」（大一五）などが行われた。また今西助教授が「李氏朝鮮史」（大八）、「朝鮮文藝史」（大九・一〇）、「朝鮮古代史」（大一四・一五）を、濱田教授が「東洋考古學」（大八・九）、「支那考古學」（大一〇・一一）を講じた。

これよりさき、明治四十四年中國に辛亥革命が起り、清朝の碩學羅振玉が王國維を伴なつて京都に流寓、大正八年まで滯在し、本學支那學關係教官との間に極めて親密な交際がつづけられ、その歸國に當つては舊鈔本及印資金の寄贈を受けたが、それらは大正十年『毛詩唐風訓詁傳殘卷・毛詩秦風正義殘卷・翰苑殘卷・王勃集殘卷』を第一集として本學部から刊行され、以後續續と發刊された。また十二年十一月には、桑原教授多年苦心の精緻な研究による『宋末の提擧市舶西域人蒲壽庚の事蹟』が刊行されたが、この業績は十五年帝國學士院賞を受け、昭和三年に

はその英譯本が東洋文庫から發刊され、翌年には二種の漢譯本が中國で出版された。內藤教授は十三年三月歐米各國に出張、英佛において敦煌文書および太平天國に關する夥しい新資料を筆錄將來して、わが國東洋學研究に大いに寄與したが、十五年八月停年により退官した。教授の學問は古代から現代にわたり、かつ史學史・繪畫史・考證學・思想史の各研究分野を新しく開拓し、またこれまでの王朝單位のいわば斷代史的研究を打破し、複雜な中國史を發展的に捉えようとしたが、その學風は內藤史學なる一體系を創造し、今日なお不滅の輝きを放なつている。さらに退官の翌二年七月には名譽教授の稱號を授けられたが、本教室關係者を中心に還曆記念事業が企てられ、その一つとして教授の知友門下の論稿三十三篇を收めた『內藤博士還曆祝賀支那學論叢』が刊行され、この種論叢の嚆矢となつた。なお續篇として昭和五年六月には『內藤博士頌壽記念史學論叢』も刊行され、二十三篇の和漢洋にわたる論文が收められた。

なおこの期の卒業論文の傾向としては、大正前期からの內容の多彩さを引きついだほか、政治・社會・經濟問題への關心の深まつたことが指摘できる。

昭和に入ると、本講座はその六年と二十年を境として、前・中・後三期に分つことができる。まず前期では、內藤教授退官後、昭和二年から桑原教授第二講座、矢野教授第一講座、羽田教授第三講座擔當となり、今西教授は朝鮮史を擔當した。この間、內藤名譽教授は二年四月から五年十一月まで講師となつたほか、第三高等學校那波利貞教授が三年四月から講師となり、さらに翌年四月本學助教授に轉任、三教授・一助教授・一講師で六年七月まで終始した。

昭和前期の講義は、東洋史概說を、あるいは桑原、羽田兩教授（昭二・四）、あるいは桑原、矢野兩教授（昭三）、あるいは桑原、矢野、羽田三教授（昭五）が分擔、特殊講義には、桑原教授の「唐律を中心とする支那の法律」（昭二）、「唐律と明律との比較」（昭三）、「史記漢書の研究」（昭四・五）、矢野教授の「近世の日支露關係」（昭二）、「支

那外交史」（昭三―五）、羽田教授の「西域史」（昭二・三）、「回鶻史」（昭四）、「西域の文明」（昭五）、今西教授の「朝鮮史の諸問題」（昭二）、那波助教授の「開元天寶時代論」（昭三・四）、「唐宋時代の都市生活」（昭五）などがあり、晩年中國法制史の研究を通じて中國家族から社會全般の構造を究めようとした桑原教授の研究の方向、また外交史に重點を置いて中國近世史の輪廓を浮彫りしようとする矢野教授の抱負、豐富な語學力を驅使して獨自の中央アジア史研究を推進した羽田教授の業績、中唐末に文化史的な近世の萌芽を見出す那波助教授の研究など、それぞれ特異の研究成果が講義題目の上にも如實にあらわれている。

當時矢野教授は中國近世の政治・外交史におけるわが國の碩學として、知識・言論・外交界を指導し、羽田教授の西域史研究は歐米の學者と拮抗するのみならず、ある方面ではこれを指導して他の追隨を許さず、ともにわが國東洋史學の重鎭として存した。五年七月、矢野教授は學術調査のため歐洲・印度・印度支那・中國へ出張を命ぜられ翌年一月歸國した。五年十二月には、東西交通史・中國法制史を講じてきた桑原教授が停年により退官、知友門下四十五名の論文を收錄した『桑原博士還曆記念東洋史論叢』が刊行された。なお教授には前記『蒲壽庚の事蹟』のほかに多くの論著があるが、それらはのちに『東洋史說苑』（昭二）『東西交通史論叢』（昭八）、『東洋文明史論叢』（昭九）、『支那法制史論叢』（昭一〇）などとして編纂刊行された。

さらに直接本學部と關係はないが、四年四月に外務省對支文化事業部が設立した東方文化學院京都研究所が、狩野名譽教授を所長として陳列館內にその事務を開始し、やがて五年十一月には北白川小倉町に完備した研究所が竣工、また八年以後後述のように同じく對支文化事業部から補助を受けて、內藤名譽教授、羽田教授の指導のもとに滿蒙文化の史的研究に從事する新組織も作られ、本研究室は相互提携して研學に多大の便宜を得た。

支那學會の存在は明治・大正期と異なるところはないが、時勢の進運は東洋史學のみの一學會を設立する必要を痛感させ、二年十月卒業生・學生の要請で、「東洋史談話會」が發足し、主任教授の主宰のもとに毎月一回例會を開

くこととなつた。また四年五月には中國古代史の權威である佛國コレージ・ド・フランスのアンリ・マスペロ教授が來學し、「支那文明の初期」と題して、中國民族の原始居住地をその家屋の構造形式から黄河下流の沖積層平原に比定する講演を行ない、ついで五年四月には英國印度政府考古學調査員で、印度にあること數十年、中央アジアの探檢に比類ない業績を收めたオーレル・スタイン博士が來學、十一月には天津北疆博物院の地質研究所長で、中國考古學界の權威であるリサン師が來て、「支那の舊石器時代」と題する講演を行なつた。

この期の卒業論文題目を一瞥すると、漢代史を對象としたものが比較的多く、ついで唐代が目立つが、塞外史や元代史または近代史を對象としたものもある。これらはいうまでもなく教授の講義内容・專攻分野に影響されているが、また昭和初年の社會情勢もそのテーマに反映してきている。

昭和中期に入つては、六年四月から矢野教授第一講座擔任・第二講座分擔、羽田教授第三講座擔任・第二講座分擔となつた。那波助教授は在外研究員として二年間佛・獨國に留學を命ぜられ、その年八月出發したが、さらに翌七年五月には、矢野教授が停年により退官することとなつた。その還暦記念事業は教授の意志を尊重して企てられなかつたが、『近代支那の政治及文化』(大一五)、『近代支那史』(大一五)、『支那近代外國關係研究』(昭三)、『近世支那外交史』(昭五)などの大著は永く斯學共通の遺産として輝いている。

矢野教授の退官と前後して、六年五月には桑原名譽教授が、七年五月には今西教授が、九年六月には内藤名譽教授がそれぞれ逝去し、にわかに寂寥の感があつたが、この間羽田教授は本講座を主宰し、よくこれに處して、その輝かしい傳統を失なわしめなかつた。八年八月、那波助教授は在留期間を短縮して歸國し、九年十二月には六年度から講師を囑託されていた第三高等學校宮崎市定教授が本學助教授に來任、十一年二月には二年間佛・米國に留學を命ぜられて出發した。ついで十三年三月には那波助教授が教授に昇任、同年十一月には羽田教授が本學總長に任ぜられるなど、昭和中期の本講座教官の異動ははなはだ多事であつた。

講座は八年九月以後、羽田教授が第三講座擔任・第二講座分擔、那波助教授は第一講座分擔となり、ついで教授に任じてからは第一講座を擔任した。しかしその年十一月の羽田教授の總長就任によつてまた教授に缺員を見た。越えて十五年には田村實造講師が助教授に任ぜられ、暫らく一教授・二助教授と毎年三、四名の講師をもつてする教官配置となつた。

この期の東洋史概説は、はじめは矢野、羽田兩教授が擔當（昭六）、ついで羽田教授、和田清講師がこれに當り（昭七）、八年九月以降は羽田教授、那波助教授がそれぞれ近世史と上古中世史を擔當し、十四年度以後は上古中世史を那波教授、近世史を宮崎助教授が講じ、十九年五月に至つて、宮崎助教授が教授となり、那波教授とともに引き續きこれを擔當した。

那波教授

特殊講義には、矢野教授の「近代ロシア支那關係」（昭六）、羽田教授の「唐代の西域」（昭六）、「東西交通史」（昭八・九）、「中央亞細亞の文化」（昭一〇）、「東方に於ける胡人の活動」（昭一一・一二）、「明清時代の中央亞細亞史」（昭一三）があり、また那波教授の「漢代の文化」（昭六）、「唐代の庶民生活」（昭九・一〇）、「唐代に行はれたる外國風俗」（昭一一）、「五代の文化史的考察」（昭一二・一三）、「春秋戰國時代の文化史的考察」（昭一四）、「支那に於ける自治の歴史的研究」（昭一五）、「支那近世の地方行政と自治制度」（昭一六）、「歴史上より觀たる支那の禮」（昭一七前）、「開元禮と太常因革禮との比較」（昭一七後）、「隋唐時代に於ける地方行政」（昭一八）、および今西教授の「朝鮮史」（昭七）も講ぜられた。宮崎教授は講師在任中から引きつづき、「宋代の制度」（昭七）、「宋代の黨爭」（昭八）、「王安石の新法」（昭九）、「宋代の役法」（昭一〇）、「近世南方交通史」（昭一三）、「近世東西交通史」（昭一四）、「清朝の制度」（昭一五）、「水滸傳に現れたる支那の近世社會狀態」（昭一六）などを講じ、十七年度からはしばらく宋代の通貨問題を究め、

「西亞細亞史概說」（昭一九）に及んだ。また田村助教授は「遼代の社會と文化」（昭一六）、「遼代の文化」（昭一七）、「清朝治下に於ける蒙古の政治形態」（昭一七後）、「南洋華僑史」（昭一八）、「清朝史」（昭一九）などの講題を掲げた。

このほか、鴛淵一講師は「明代の滿洲」（昭六・七）、「清朝興起史」（昭八―一〇）、「清太祖の蒙古經略」（昭一一）、「清初八旗制度考」（昭一二・一四）、「清初刑政考」（昭一五）、「明末蒙古部族考」（昭一六）、「明代滿鮮交涉史」（昭一七前）、「清代滿鮮交涉史」（昭一七後）を、池内宏講師は「南鮮上世史の研究」（昭八）を、加藤繁講師は「唐宋經濟史考」（昭九）、和田清講師は「明代制度史」（昭一〇）、岡崎文夫講師は「六朝時代史」（昭一一）、杉本直治郎講師は「安南史」（昭一一）、「安南と日本との關係」（昭一六）、神田喜一郎講師は「支那目錄學」（昭一四）、三品彰英講師は「朝鮮通史」（昭一一・一七前）、「朝鮮古代史の特殊問題」（昭一五）、石濱純太郎講師は「歐洲に於ける東洋學の發達」（昭一二―一五）、「歐洲人の西伯利亞研究史」（昭一六）、「Altan-tobči の研究」（昭一七前）、「蒙文史籍研究」（昭一七後）、「フフデプテルの研究」（昭一八）、森鹿三講師は「支那歷史地理研究法」（昭一二）、安部健夫講師は「宋元社會史上の特殊問題」（昭一三・一四）、「元朝中統以後の通貨政策」（昭一五）、「元代公牘の研究」（昭一八）、小川（貝塚）茂樹講師は「支那上代金文の研究」（昭一七前）、内田吟風講師は「北魏を中心として觀たる南北朝の社會」（昭一七後）、外山軍治講師は「金代中期の政治と社會」（昭一七後）、「靖康の變の研究」（昭一九）、愛宕松男講師は「元朝の財政と財政政策」（昭一八）、「蒙古史序說」（昭一九）などをそれぞれ講じた。

この期は、羽田教授の主任教授として在任中の後半に當るが、教授はその圓熟した學識と堅實な學風の上に立つて蘊蓄を傾け、その主要業績である『西域文化史』その他の西域史の概說は、主としてこの時代の研究の集大成されたもので、教授の演習「東洋史の諸問題」（昭七―一三）も多く西域史に關する問題を中心としている。那波教授は留學中、佛國國立圖書館において、ペリオ教授蒐集の燉煌文書を鋭意轉寫して將來、歸國後はこれらの文書を演

習「敦煌發見唐代史書研究」（昭一三―一八）に用いて、學界未知の民間文書の紹介に力を注ぎ、また特殊講義その他論文として發表した。宮崎教授は宋代社會經濟史を國家財政の面から把握し、東西交通史・西アジア史研究にも志した。田村助教授も、のちに學士院恩賜賞を受けた遼代文化の研究に主力を注いだ時期に當り、遼代帝王墓の實地踏査に基く豐富な知識が、文獻上の史料と結合され、特異な北方民族文化の解明に貢獻し、さらにより廣い視野に立つて北方民族全般の研究へと進み、明清代の滿蒙史の研究に及んだ。

昭和三年正月には內藤博士還曆記念事業の餘資によつて、故富岡講師所藏の『四譯館則』が羽田教授の校訂により本研究室から發刊され、十年十一月には、久原文庫所藏の貴重古寫本『延久五年寫史記孝景本紀第十一』が那波助教授の解說を附して、本學部から複製公刊された。その他三年秋には「蒙文丹殊爾」を入手、附屬圖書館に上架された「西藏文丹殊爾」と相まつて、蒙古語乃至は蒙古佛教研究の貴重な鍵となり、また十一年十二月には、「成吉思皇帝聖旨牌」なる世界的貴重品の入手が羽田教授の努力により實現した。さらに七年六月には後記のように桑原教授の藏書約一萬三千册が寄贈され、桑原文庫として永く研究に資せられることとなつた。

この期の卒業論文題目を概觀すると、漢代以前あるいは南北朝時代を取り扱つたものは極めて少なく、隋唐代および宋代に集中的で、元・明代また數篇に過ぎない。清代を對象としたものは割合多いが、だいたい清初または清末に限られていた。中國以外をテーマとしたものも多く、西亞・印度史にまで及び、その他金代史や朝鮮史、あるいは北方民族と中國との交涉史などを扱つたものも數篇見える。このように研究題目の範圍が漸次近世史に及んで來たことは學界全般の研究の進步を示すもので、論文の焦點・內容ともに適切豐富となつてきている。

また六年から九年までの毎夏季休暇中には、專攻學生有志の華北見學旅行が行われた。專攻學生も昭和に入つて急增し、三年度一一名・六年度一〇名・七年度一三名・九年度一一名・十年度一〇名の卒業生を算し、その後も毎年五―七名が卒業した。大學院在學者はつねに十數名あり、東洋史談話會もいよいよ盛んで、十一年十一月以降毎

年一回大會を開催することとなり、八年に卒業生によつて組織された「東洋史研究會」は、十年十月から隔月に機關誌『東洋史研究』を刊行するとともに、東洋史研究會叢刊として『滿和對譯滿洲實錄譯稿』、『吏學指南』、『大藏本大明令』を出版した。また七年九月から十三年三月までの間、外務省對支文化事業部からの委託研究を受け持ち、滿蒙文化研究事業の一部である滿蒙史研究に從い、契丹史と女眞史の研究を主題とし、併せて『皇明實錄』から滿蒙關係史料を鈔出、その成果は日滿文化協會の助成による『滿蒙史論叢』および『東方史論叢』として刊行された。

昭和後期は、昭和二十年の終戰から現在に至る時期であるが、まずこの期には、羽田總長が二十年十一月に退官、名譽教授の稱號を授けられ、引き續き東方文化研究所長としてこの困難な時期にその維持に力を盡し、二十三年同研究所の京都大學人文科學研究所への合併を實現した。田村助教授は二十二年五月教授に昇任、同年六月には大阪外事專門學校宇都宮清吉教授が本學助教授に任ぜられ、漢代社會經濟史を講じたが、間もなく翌年九月名古屋大學教授に轉じた。また二十四年五月には山口經濟專門學校佐伯富教授が本學助教授として來任、さらに二十九年七月には神戸大學佐藤長助教授が本學助教授に轉じ來つた。なお羽田教授の總長就任とともに、昭和十三年以降主任教授として戰時・戰後の混亂期を含む困難な時期に本講座を主宰し、今日の興隆をもたらすに力のあつた那波教授は、二十八年八月停年により退官、名譽教授となつた。教授の學風は初期の論文に示されるように支那學の色彩を帶び、中國上古中世文化史、就中都市の研究に向けられたが、外遊後はもつぱら燉煌發見の民間文書を用いて唐宋時代の庶民・寺院經濟などに關する研究をすすめ、その未見資料の紹介は學界を益すること大なるものがあつた。

また三十年四月には羽田名譽教授が逝去した。教授は白鳥庫吉博士の高弟としてその西域史研究を推進し、ことにわが國におけるトルコ史研究の先驅者であるのみでなく、豐富な語學力を驅使して、廣く北方諸民族の歷史も究め、夙に名著として知られている『西域文明史概論』(昭六)、『西域文化史』(昭二三)のほか論著頗る多い。史料の

蒐集・研究者の育成にも留意し、總長の激務中にあつても研究指導に意を用い、多くの俊秀を門下から輩出した。二十五年には、還暦を記念すべく計畫されていた獻呈論文集が『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』として出版され、また佛國東洋學界の最高榮譽ジュリアン賞（昭二七）、わが國の文化勳章（昭二八）、佛國最高の功勞を讃えるレジオン・ド・ノール勳章（昭三〇）を相ついで贈られた。

なお羽田教授業績の一つとして特記すべきものに明代滿蒙史料の刊行がある。それは皇明實錄から滿洲・蒙古に關する一切の資料を抄出刊行しようとする大事業であるが、內藤・羽田兩教授の主唱により、早く昭和八年外務省文化事業部がその監修を兩教授に委囑したのに始まる。そして內藤教授逝去後はもつぱら羽田教授の指導するところとなり、十三朝二九一〇餘卷の皇明實錄からの抄出資料の取捨選擇、數種の異本の對校など限りない努力ののち、五か年にして一應稿本明實錄抄は完成したが、その後も補訂校合が續けられた。全卷十五册を豫定する大規模なものであるため、稿本の出版は容易に實現されず、前述のように昭和十七年日滿文化協會の手でその第一册が公刊されたまま中絶していた。しかし二十九年文部省學術課の援助を得、本學部から繼續事業として刊行されることとなり、現在田村教授の監修指導のもとに續續刊行中である。

なお講座は、那波教授が在任中は引きつづき第一講座を擔當、また宮崎教授は十九年以後第二講座を、田村教授は二十一年以後第三講座をそれぞれ擔當して今日に至つている。東洋史概說は、那波、宮崎兩教授（昭二〇・二一）、那波・田村兩教授（昭二二―二四）、宮崎、田村兩教授（昭二五）によつて行われたが、二十六年度新制度に入つてからは學部で行われなくなつた。

研究（特殊講義）としては、那波教授が「唐代の社會」（昭二〇）、「兩漢時代の民政」（昭二一前）、「中晩唐の時世と唐の宣宗」（昭二一後）、「唐代の庶民・五代の文化と庶民」（昭二三）、「中國胥吏の研究」（昭二四）、「唐代佛寺の社會的經濟的考察」（昭二五）、「唐代庶民史料の研究」（昭二六）、「隋唐文化世界」（昭二七）、「外國人の眼に映じたる中

國人の生活」（昭二八）などを講じ、宮崎教授は「支那政治思想」（昭二〇）、「東洋最近世史の研究」（昭二一）、「宋代の地方政治」（昭二二）、「雍正帝と其の時代」（昭二三・二四）、「太平天國の研究」（昭二七）、などを、田村教授は「漢民族の南方發展史」（昭二〇）、「北方民族と漢民族との歴史的關係」（昭二一）、「北方民族史の研究」（昭二二）、「東洋史上に於ける民族移動の問題」（昭二三・二四）、「中世蒙古社會の研究」（昭二五）、「征服王朝の研究」（昭二九）、「均田制の研究」（昭三一）などを講じた。また佐伯助教授は「清代の鹽法」（昭二四・二五）、「明代の鹽法」（昭二六・二七）、「明代の財政問題」（昭二八）、「明代の地方制度」（昭二九）などを講題とし、佐藤助教授は「西臧史」（昭二七・二八）を講じた。

このほか、教養部の羽田明教授は二十二年「西域史」を講じてから、毎年中央アジア史を講じて現在に至り、人文科學研究所の小野川秀美助教授は三十年度「康有爲の研究」を、同じく島田虔次助教授は本年度「中國近世思想史の諸問題」を講じている。さらに外山講師の「太平天國の研究」（昭二〇）、「中國歴代國都の食糧問題」（昭二一）、愛宕講師の「蒙古史」（昭二〇）、「マルコポーロの旅行記を通じて觀たる元代政治」（昭二一）、貝塚講師の「新史料を通じて觀たる殷周時代の文化」（昭二二）、「中國古代社會史」（昭二三）、村上嘉實講師の「魏晋の老莊思想」（昭二四）、「六朝精神史」（昭二五）、大島利一講師の「中國古代史の諸問題」（昭三〇）、宮川尚志講師の「六朝時代史」（昭三〇）があり、本年度は曾我部靜雄講師の「中國鄉村形態の變遷」が講ぜられた。

なお二十九年度から大學院文學研究科修士課程の講義が開かれ、宮崎教授の「胥吏の研究」（昭二九）、田村教授の「蒙古民族史」（昭二九―三一）、佐伯助教授の「宋代專賣制度の研究」（昭三〇）、佐藤助教授の「魏晋南北朝の社會と北方異民族」（昭三〇）、「新舊唐書吐蕃傳の研究」（昭三一）が講ぜられた。

宮崎教授はこの時期に「中國近世における生業資本の貸借について」、「宋以後の土地所有形態」、「宋代の士風」などを發表し、内藤教授の遺した東洋史の體系を、とくに社會經濟史の面で飛躍發展させようとした。また田村教

授は長年にわたる北方民族に關する堅實な基礎研究の上に、滿蒙北支の實地踏査の結果を加味し、「遼代に於ける徒民政策と都市・州縣制の成立」など幾多の劃期的な業績を殘し、さらに十四年に實地調査を行なつた興安嶺麓ワールインマンハにおける遼代帝王陵の壁畫その他の資料を整理研究した調査報告『慶陵』（昭二七・二八）は、二十八年に朝日賞を、二十九年には學士院恩賜賞を授與された。佐伯助教授は、長年にわたり國家財政の立場から宋代社會經濟史の研究に從い、すでに幾多の業績を發表し、就中近世中國の獨裁君主制を支える經濟的地盤としてもつとも重要な專賣制度の研究をもつて斯界に知られ、一貫した鹽法の研究を中心に明清にその專門分野を擴げ、佐藤助教授は數少ないわが國の西藏史の專門家で、西藏文の原史料から唐代吐蕃の研究を推し進め、注目されている。また近時研究の精密化と、史料の增加する傾向の中にあつて、諸種の索引の編纂は基礎的な仕事として學界にもつとも要望されているが、佐伯助教授はこの方面にもとくに力を盡し、『官箴目次綜合索引』（昭二五）の編纂をはじめ、『雅俗漢語譯解』（昭二六）、『福恵全書語彙解』（昭二七）などの語彙を自ら五十音順に排列しなおして索引とし、相ついで東洋史研究室または東洋史研究會から油印發行した。また中國の雜記・隨筆類約一六〇種の題目中の主要語を五十音順に排列した『中國隨筆索引』（昭二九）も佐伯助教授らの努力により編纂され、東洋史研究會から發刊し、學界を裨益している。

戰後は歷史學界一般の傾向と同じく、東洋史學においても歷史の進展の底流をなす下部構造の分析にその關心が集中され、社會經濟史の研究が劃期的な進歩を示した。これは歷史學の研究が本來とるべき方向に進んだことを示すもので、意識すると否とに拘わらず、唯物史觀の批判の前に立ち、歷史的價値の再檢討を要求されていることは否定し得ない。歷史の發展段階說をめぐる時代區分論が戰後活潑に論爭されているごときはその一例であり、そこに東洋史の體系的把握が要請される所以である。この期の卒業論文題目をみてもこの傾向は顯著である。

たとえば、兩漢社會の研究に當つてももつとも重要な豪族乃至貴族の分析が焦點となつており、北魏を取り扱つ

たものもいずれも土地問題が中心をなし、唐代では財政史、宋代でも前近代社會の特質を追究して商業資本が問題になつている。元・明代ではそれぞれ社會史、あるいは國家財政史・官制史が取り上げられ、また清朝史は殊に末期の歐洲資本主義勢力の中國侵略前後の時期にテーマが集中している。この期の初期の論文には戰後混亂期の反映として結論を急いだ浮薄なものも見られたが、テーマの選擇の適正さは社會の落着きとともに論文內容をも充實させ、堅實な基礎研究の方向に進みつつある。また戰時中から戰後にかけ、一時低調をたどつていた東洋史談話會、および東洋史研究會の動きも、學藝復興の機運とともに活潑さを取り戻し、毎年秋期の談話會大會には國內各地からの參加者が堂に溢れ、かつて見ない斯學の盛運を示しつつある。

史學地理學第一・第三講座（西洋史學）

本第一講座の創設は明治四十年五月、第三講座の增設は四十二年五月であるが、その現在に至る歷史を通觀するとき、本講座においては、昭和三年を境として大きく前後の兩期に區分することができる。すなわち、この年一月講座創設以來その發展に盡力し、また草創期のわが國西洋史學界の重鎭として知られた坂口昂教授が逝去、相ついで同年八月には新進の學徒として囑望されていた植村清之助助教授が逝去した。これよりさきに大正十三年には、これまた講座創設期の功勞者原勝郎教授が逝去しており、本講座の悲運は昭和三年にその頂點に達したかの觀がある。

まずそれ以前の時期を概觀すると、明治四十年四月、坂口昂が助教授に任ぜられ、四十二年には原勝郎教授が來任、中村善太郎また講師となつて開講された。わが國における西洋史への關心は古く蘭學に遡るが、明治維新を機とする近代日本への轉化は、いわゆる文明開化の風潮となり、それはまた歐米文物の輸入によつて一層促進され、

それとともに西洋史への關心も著しく高まつた。明治十九年東京帝國大學に史學科が設置され、ドイツからルードヴィヒ・リースが招かれて、西洋史を講ずるようになつて、從來單に西洋文化一般についての常識としてのみ學ばれていた西洋史が、ようやく專門家によつて研究される傾向が芽生えて來た。しかし、明治年間の西洋史研究は、いわばヨーロッパ的知的水準に到達するための啓蒙的段階を出でず、ヨーロッパ史學の概說的紹介の域を脫し得なかつた。そこにはまだ西洋史研究自體が成長せず、ヨーロッパ史學の新しい研究法を、もつぱら國史・東洋史にもたらす役割を果したに過ぎなかつた。わが國の西洋史學が、その對象と方法において獨自の分野と立場をもち、學問として獨立するようになつたのは大正に入つてからで、この點坂口、原兩教授はただ本講座の創設者であるのみならず、同時にわが國における西洋史學の樹立者・開拓者でもあつたといえよう。

原勝郎教授は、明治四十二年教授として來任し、本第一講座を擔任、大正十三年一月の逝去に至るまでもつぱらヨーロッパ最近世史を講じた。本學部は、その創設に際しさまざまの特色を有していたが、史學科に最近世史の講義が正科目として設置されたことは教授の功績である。教授は、この特色をもつともよく生かし、普通講義・特殊講義として、おもに十九世紀後半以後のヨーロッパ最近世史を講ずるとともに、「米國史」(明四五—大二)、「ビスマルク」(大四・五)、「ロシア近代史」(大七)などの特殊講義をも行なつた。そして、晩年もつとも力を盡したのは世界大戰史の研究であつて、大正九年以降の講義はもつぱらこれに關したものであつた。

原教授は、大學卒業後直ちに軍役に就き大陸に遠征した經驗をもち、また盛んに政治外交を論じた。頭腦明晰にして博覽强記の教授は、とくに大戰前後の複雜なヨーロッパ政情の動向を鋭敏に觀察し、その俊鋭な推論は直ちに現象の背後に透徹して事件の核心を突留めるという點、まさに天才的なひらめきがあつたが、この教授の特色をもつともよく示したものは、その主著『世界大戰史』(大一四)である。それは大戰後間もなくまだ關係史料が十分整理發刊されていない時に、ただわずかにカウツキー文書などの不充分な史料をもつて、鋭利な史眼と嚴密な史料批

判を驅使しながら、第一次世界大戰前後の外交關係を分析敍述したもので、極めて精緻、他の追隨を許さないものであつた。不幸教授の早逝によつて、この研究は中道にして止んだが、斯學への貢獻は大なるものがあつた。

なお教授の學問的業績としては、他に『歐米最近世史十講』(大四)、『西洋中世史概說・宗教改革史』(昭六)、『日本中世史の研究』(昭四)、および"An Introduction to the History of Japan"(大九)などがある。『日本中世史』(明三八)はその學位論文であつて、日本の史學界へ西洋史學の方法と史風をとり入れた極めて斬新な歷史敍述であり、その洗錬された美文とともに、當時非常に高く評價されたものであつた。教授の日本歷史に對する關心は終始やむことなく、その「東山時代の一縉紳の生活」などは注目すべき雄篇とされた。また英文による日本史手引は、わが國の歷史家が自ら著わした最初のものとされ、わが國の文化を廣く海外に紹介したものとして、その業績は忘れることができない。このような教授の學問的足跡は、そのままわが國の西洋史學が、明治期の紹介的啓蒙的段階から、次第に大正期に入つて專門的特殊的なものに發展分化していつた姿である。同じような傾向がやや異なつた方向において示されているのは坂口教授である。

坂口昂教授は、明治四十年四月助教授として來任、四十五年一月教授に任ぜられて、本第三講座を擔任した。以來昭和三年一月の逝去に至るまで、普通講義として西洋史概說を講ずるとともに、特殊講義としてはヘレニズムを中心とする古代史、神聖ローマ帝國史、ルネサンス時代史などと各方面にわたつて講じ、晩年にはもつぱら十九世紀ドイツ史學史の研究に力を盡した。またかたわら史學研究法をも教授し、歷史哲學・史學理論にも深い關心を示した。なお教授は、原學部長急逝のあとをうけ、學部長として大正十三年から昭和二年まで、學制の改革と設備の充實に力を致した。

坂口教授は東京帝大においてリースに學んだが、それは教授の學風にほとんど決定的な影響を與え、ランケの門人であるリースを通じてランケ史學を學び、それを繼承して終始變るところがなかつた。教授の個別研究がつねに

世界史的視野において展望されているのはこのためである。たとえば、明治四十五年の史學研究會における、「古代史研究の發展について」と題する講演のごときは、もっともよくこれを物語るもので、教授は、古代史研究が啓蒙期の學問的段階からニーブールの史料批判を經て科學的研究に轉じ、その對象がローマ史・ギリシア史のみならず古代東方全體にまで擴大したこと、この古代史研究の發展によって、古代世界がすでに大きな國際關係を形成していたことが明證されると論じた。それは近世における古代史の發展を跡づけながら、古代史を古代世界的連關において把えようとする主張にほかならない。教授のこのような古代史についての世界史觀は、『世界に於ける希臘文明の潮流』（大六）に結晶した。本書において教授は、ギリシア文明がアレクサンデルの世界政策によって東方に傳わり、さらにローマ文化に影響し、中世のビザンツ・サラセンに傳播し、ルネサンスの有力な要素となり、さらに古典主義・浪漫主義運動の根柢となった過程に論及し、ギリシア文明の時間的空間的な生命の持續を說いた。

ついで大正九年には『概觀世界史潮』が公刊されたが、本書こそランケ史學の影響を濃厚に留めた教授の綜合的世界史でありいまなお古典的な價値を失なっていない。さらに教授には『ルネサンス史概論』（昭五）、また古代・近世・近代史學史の諸問題を論じた『世界史論考』（昭六）、『獨逸史學史』（昭七）などがあり、とくに後者は教授晩年の四か年間の連續講義であり、十八世紀の史學から論を起し、ヘルデル、カント、フィヒテ、ヘーゲル、ニーブール、ランケ、ドロイゼン、ジーベル、トライチュケ、モムゼンなどの史學思想の發展をたどり、鋭利な批判と、公正な位置づけを與えたわが國最初の眞の史學史であったといえよう。なお大正十一年にはベルンハイムの『歷史とは何ぞや』と、リースの『世界史の使命』の譯書がある。これらによっても、教授が事實の集積をこととする俗流史家でなく、歷史學の學的根柢を深く哲學的にほり下げながら、これをより高次な世界史的連關にまでもたらそうと志した偉大な世界史家であり、またすぐれた歷史哲學者であったことが知られよう。

植村清之助助教授は、大正七年講師となり、十二年十二月助教授に任じ、十五年から本第一講座を分擔した。昭

和三年急逝するまで、時に西洋史概説（大一五—昭三）を講じたが、特殊講義は、もつぱら中世の國家社會に關するものであつた。その遺著『西洋中世史の研究』（昭五）は同助教授の多年研究の成果であり、困難な西洋中世史研究を開拓したものである。その卷頭に收められた「中世初期に於ける國家社會的變遷の研究」は、その學位論文であるが、古代ローマ文化とゲルマン民族文化の融合調和過程を、社會史・政治史・文化史の各面にわたつて執拗に追求したものであつて、しかもラテン原史料の考證は精密を極め、その堅實な學風は、わが國西洋史學界の高い水準を示したものとして、今もなお學的價値を失なつていない。不幸四十六歳をもつて早逝したが、わが國西洋中世史學は、同助教授によつてその礎石を置かれたといつても過言ではなかろう。

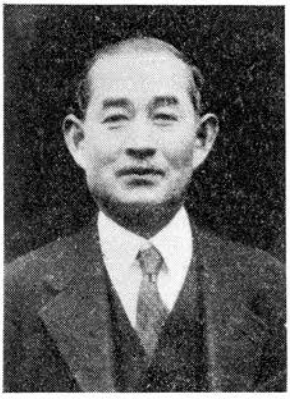
なおこれら三教官のほかに、中村善太郎講師と大類伸講師が普通講義として西洋史概説を擔當し、また特殊講義として、前者は近世專制政治史を、後者はルネサンス史を講じ、昭和三年には石田幹之助講師が來講して、スキタイ文化を講じた。

この間明治四十三年十月に、第一回卒業生の首唱によつて「西洋史讀書會」が創められ、當初は隔週に教授の指導によつて外國雜誌を讀むことが主眼とされたが、のち外國圖書の紹介・研究發表・討論を加え、今日に至つている。その間大正年間一時中絶し、同八年再興され、原教授逝去後、ふたたび絶えたが、十四年四月復活し、今日まで回を重ねること數百回に及んでいる。なお昭和八年には、大正八年の再興以來十五周年を記念し、大會が開かれたが、以後毎年秋季大會をもつようになつた。また最近はその大會が次第に學外との交流を主として、發會當時の同窓的意味が失なわれるようになることを恐れ、昭和一十八年四月からは、もつぱら卒業生の研究發表討論の場として、春季大會を開催することになつた。かくて春秋二季の大會はそれぞれ性格を異にしながら、ともに西洋史學の發展と卒業生相互の親睦に資している。

この期の卒業論文についてみると、學生はいつのころからか、卒業論文の研究課題を西洋史讀書會の例會で發表

し、教官・卒業生の批判指導をうけるようになつたが、その傾向は今日とそれほど大差のあるものでない。ただ當時の指導教官であつた原教授の講述した最近世史、坂口教授の古典文化解説の影響が強く見られるのは當然であろう。

昭和三年は、はじめにも述べたように、本講座にとつては、坂口教授と植村助教授の急逝が相つぐという悲運の年となつた。かくて四・五年は中村、大類兩講師に、濱田、矢野兩教授の講義が加えられて授業が繼續されたが、この間危機に頻した本講座を建て直したのは時野谷常三郎教授と原隨園教授であつた。そしてこの年から終戰の二十年までが、本講座にとつての一時期で、本講座に今日みられる特性は主としてこの間に培われたもので、戰後は學制の改革と相俟つて、この軌道の上にまた新しい特色が加味される時期となつた。



時野谷教授

時野谷教授は、大正十四年五月本學助教授となり、ついで昭和八年五月教授に昇任、本第三講座を擔當した。普通講義として西洋史概説、特殊講義としておもに十九世紀史を講じたが、そのビスマルク研究は畢生の研究であつて、教授の外遊によりますます深められ、「ビスマルクの外交政策」は極めて精密な學位論文となつた。特殊講義の題目としては、「近代ドイツ植民史」(昭九)、「十八世紀の英國」(昭一〇)、「アイルランド問題の推移」(昭一一)、「グラッドストンの愛蘭統治策」(昭一二)、「ビスマルクと文化闘爭」(昭一三)、「獨佛戰爭におけるヨーロッパの狀勢」(昭一五)と、つねに適切な歴史上の諸問題に答え、しかも詳細なドキュメンテーションは聽講者を魅了したといわれる。その著『現代の世界史』(昭八)は啓蒙書ではあるが、教授の蘊蓄をうかがうに足り、また明治維新に關する著述においては、日本史に對する造詣の深さをも示した。現代政治に對する俊鋭な感覺をもちながらも、昭和十七年一月退官の後、第二次大戰の歸結を知ることなく、

間もなくその年の十二月に逝去した。なお教授在任中に計畫された本研究室編『世界史大年表』は以來十年の歳月を經て昭和二十一年完成されたが、その莞爾として微笑する特色ある風丰とともに長く忘れ得ぬものとなろう。

さて、本講座創設以來その基礎を築いた以上の諸教官とともに、本講座を今日あらしめた人として、原隨園教授の功績は大きい。原教授は早く箕作元八、大類伸兩教授の學風に接し、ドイツ留學中はゲッチンゲン大學においてカール・シュテット教授につき、なおエドワード・マイヤー、ヴィラモヴィッツ・メルレンドルフ諸教授の影響をも受けた。本學に轉じて後は、西洋史概說を擔當するかたわら、特殊講義として、「ギリシア通史」(昭八)、「アリストファネスにみゆるアテナイの社會相」(昭七)、「ギリシア政治思想史」(昭一一—一三・一五・一六)、「ギリシア精神史」(昭一七前)、「ギリシア史學史」(昭一七後) など主にギリシア史を講じ、また文藝復興期の精神を論じたほか西洋史上の特殊問題について適時その史觀を吐露した。教授の代表作『ギリシア史研究』三卷(昭三) は、實にこのような研究過程の集成であり、從來西洋古典世界に對する漠然たるドクサの域を出なかつたわが國の古代史學をはじめてヒストリアの域にまで高めたものとして、その先驅的な功績は滅却することができない。中に收められた「テセウス傳說考」は學位論文である。

教授の學風は、まず史料につき、史料の中から歷史を汲むことに終始した。史料入手の困難なわが國西洋史學の通弊として、あるいは歷史哲學的歷史に流れ、內容空虛な理論のみの橫行に歷史が委ねられようとする時、教授のこの學的態度は大いに反省の糧とすべきものである。さらに教授の歷史に對する豐かな情操は、史料主義を固持しつつも史料に溺れることなく、よく現象の背後に動く人間性の機微に透徹しえた。この獨自な觸手こそ、たとえば古傳承の解釋においては、新しいエトノロギーの樹立に成功し、またその歷史に一つの普遍性を與えた理由であつた。その若き日の名作として知られる「大地の力」、「オリンピア祭における主神の問題」などの論考は、古代傳承の解釋としては當時門外の學徒をも驚嘆せしめた。

なお教授の學的生活の前期をなすこの期の業績には、ほかに『ギリシア神話』(昭一四)がある。これは神神と自然との關係・生活技術と神神との關係・社會生活と神神との關係の三點から神話解釋における獨自な領域を開拓し、古代生活における宗教の意義を明らかにしたものである。また數ある西洋通史の中でも格調高い名著とされる『新義西洋史』(昭一〇)は、教授の數年にわたる推敲ののちに成つたものである。いつたいに教授が、文體の彫琢にも意を用いることを忘れない學者であることは、ハーゼブレック『ギリシア都市國家經濟』(昭一八)、レーヴイ『ギリシア彫刻史』(昭一七)、アリストテレス『アテナイ人の國家』(昭一五)などの譯業にも見ることができる。

なおこの期においては、時野谷、原兩教授の努力によつて、往年に倍加した講義陣容と研究內容を持つようになつたが、昭和十七年からは鈴木成高助教授が、翌年からは井上智勇助教授が本學に來任、それぞれ專門とする中世史・古代史を講じた。鈴木助教授の『ランケと世界史學』(昭一四)、『歷史的國家の理念』(昭一六)、井上助教授の『プラトンの國家觀』(昭一〇)などは、當時高等學校教養層に投じた斬新な書として、京都史學の名を高からしめたものであつた。戰後いち早く世に問われた、鈴木助教授の劃期的著作『封建社會の研究』(昭二三)は、實にこの間の講義案をもととして集大成されたもので、その全般に通ずる問題史的展望と包括的體系性を特徵とする本書もまた、本講座の達成した最大の業績の一つであろう。同助教授は「學部の歷史」で述べられた事情によつて昭和二十二年七月退官したが、今なおユニークな史家としての歩みをつづけている。

井上助教授の研究業績についてはのちに詳述するが、なお以上のほか、わが國における唯一のエジプト學者であつた岡島誠太郎講師、エーゲ文明についての考古學的・美術史的研究に獨自の領域を開いた村田數之亮講師、フランス史學に關するユニークな研究領域を開拓しつつあつた前川貞次郎講師、ドイツ政治史の課題を探究した中山治一講師らが交互に教壇に立つた。なお昭和二十二年に發刊された京都大學西洋史研究室報告『說苑』は、前後三卷に留まつたとはいえ、內燃する新進の業績を網羅したものとして、この期を記念することとなつた。

なおこの期の卒業生は、その前後に比して數において遙かに少ない。これは戰陣に有爲の學徒が斃れ、社會不安に勉學の望を絶たれ、また學問的にも懷疑をいだいたことなどによるであろうが、そのために學問的な廣汎な層の形成を缺いたことは、その輝かしい業績にもかかわらず、この期に一抹の淋しさを覺えさせるものであつた。卒業論文の傾向としては文化史的分野に關するものが多く、戰後社會經濟史に集中したことと顯著な對照をなしている。

戰後十年、今日では相對的な安定期に入つたが、この十年は歴史家が眞に歴史に生きた時代として、また歴史學がそれによつて未曾有の深化をみた時代として、永久に忘れることはできない。本講座が時代の要請のなかに脚光を浴びたことはいうまでもなく、本講座關係者の輝しい活躍は何よりもこれを物語つている。

原隨園教授は、戰後いちはやく『自由主義の歴史』(昭二二)を世に問うたが、自由主義の本質を說き、ギリシア・ローマ・中世・ルネサンス・近代の諸革命・社會主義にまで及ぶ人間自由の追求の歴史を、圓熟した史家の高みから敍述したこの書は、教授の該博な知識と史觀を知る手引であるとともに、當時時代の趨勢の中に流れ出た數多くの類書の中で、今なおひとり眞價をもつものといえよう。その他短篇『ギリシア文化』(昭二二)、隨筆集『涉史漫筆』(昭二一)など多く、また最近の業績に「L'Europe vue par l'Asie」(アジアからみたヨーロッパ)(昭三一)がある。講義としては引き續き西洋史概說を講じ、特殊講義ではギリシア精神史・政治思想史を中心とし、演習では學生の專門に應じ、また西洋史のあらゆる問題をとらえ、つねに歴史家として忘れられた視角を喚起するのに努めた。

さらに教授は、二十二年圖書館長、翌年文學部長、二十五年新設教育學部長事務取扱、二十七年文學部長などと戰後の學内行政の樞機に參畫し、二十五年には學術視察のため渡米した。

井上智勇助教授は、昭和十八年五月助教授、二十三年六月教授となり、本第三講座を擔當した。講義としては西洋史概說を原教授と分擔する一方、研究としては「キリスト教とヨーロッパ文化」(昭二一)、「中世精神史の諸問題」(昭二四)、「アウグスチヌスの歴史觀」(昭二五)、「中世社會の研究」(昭二七)、「ローマ帝國の成立」(昭二九)、「古代

末期の世界觀」（昭二九）、「ローマ帝國の社會經濟史」（昭三〇）などを講じ、その關心はたえず古代ローマと中世世界成立の問題に集中した。教授は昭和二十八年「キリスト教とヨーロッパ文化」を研究題目としてドイツに留學したが、それはこの問題が教授の終始關心の對象であることを物語るとともに、端的にはその史觀に直接するものといえよう。

教授の力作『ローマ經濟史研究』（昭二三）は、その學位論文であるとともに、未開拓のローマ經濟史にはじめて鍬を入れた、わが國西洋史學界近年の大きな收穫であつた。收められた三篇の中、「ラティフンディアの成立と經營」と「コロナトウスの本質と成立」においてはローマ農業史における基本問題に初めて眞正面から取組み、「ローマ商工業の發展と構造」では古代世界經濟の獨自な制約と法則を解明した。由來教授の問題意識はアルフォンス・ドープシュの中世社會成立期の精緻な研究に發し、これを古代世界の中に遡及して行くことから生れた。そのさいフォン・ベロウらの中世社會についての構想も教授の思索過程に影響を與えたが、また著名な古代史家ロストフツェフ、テニー・フランク、サルヴィオリ諸教授の著作が教授によつて同書のなかに攝取され批判されつつ、統一的に生かされていることが注目される。

教授の他の二著『地中海世界史』（昭二二）、『ヨーロッパ成立期の研究』（昭二三）は、一つは教授の古代世界に對する史觀を物語り、他は多年克明にかつ精力的に紹介し、思索しつづけて來た古代末期、ヨーロッパ成立期の構造を獨自な筆致で描いたもの。他にブランデンブルク『世界史の成立』（昭一八）の譯業がある。

つぎに前川貞次郎助教授は、昭和二十七年四月本學人文科學研究所から本講座に轉じ、主としてフランス史を中心とする西洋近代史を講じている。「フランス革命の研究」（昭二一）、「フランス革命と二月革命」（昭二二）、「フランス革命研究史」（昭二五）、「十九世紀史概說」（昭二七）、「ヨーロッパ近世史」（昭二八）、「フランス革命史—國民公會」（昭二九）などの講題にも現われているように、その研究對象は終始フランス革命史研究とフランス革命との並

行的理解にある。個別研究の深化とともに史學史的な全體的考察を忘れない同助教授のこの學問的態度と方法は教訓に富むが、新文獻の購入と相まつて革命史の實證的研究はその後も着着と進められている。

またその處女作『フランス史學』(昭一七)はドイツ史學偏重の觀のあつたわが國史學界にフランス史學の涼風を吹き込んだものであり、近著『フランス革命史研究』によりさらに發展させられ、その他譯書として、コンドルセ『人間進歩の歴史』(昭二四)、ドーソン『近代のジレンマ』(昭二八)、ルソー『社會契約論』(昭二九)などがある。

なおこの間、村田數之亮(昭二〇)、中山治一(昭二二・二三・二六・三〇)、水川溫二(昭二八)、兼岩正夫(昭二九)、今津晃(昭二八・二九)、増田四郎(昭三〇)、岡部健彦(昭三一)の諸講師がそれぞれエーゲ文明、帝國主義、古代キリスト教、中世文書學、アメリカ史、ドイツ中世史、ドイツ帝國主義について講じ、また教養部中原與茂九郎教授(昭二六—三一)、同豊田堯助教授(昭二六—二九)、人文科學研究所會田雄次助教授(昭二六—二九)は授業擔當として古代オリエント、フランス革命と社會主義、ルネサンス史を講じた。また越智武臣助手は三十一年四月から講師に任ぜられ、イギリス中世史を講じている。

なおこの間における本講座關係者共同の業績として、原教授の計畫のもとに古典的著作の飜譯を志した『史學叢書』は戰時中から發刊され、また戰後は『京大西洋史』一卷、最近は原教授直接指導によつて『地理と世界の歴史』叢書九卷が刊行されている。

圖書の整備は、戰後輸入の解禁とともに急速に促進されたが、さらに時野谷教授の藏書「時野谷文庫」が寄贈され、ドイツ近代史の研究に便宜を與え、岡嶋誠太郎講師の藏書「岡嶋文庫」、金倉英一氏の藏書「金倉文庫」が新たに購入され、前者は古代エジプト學の研究にまたとない貴重な寶庫となり、後者はルネサンスならびにイタリア史の研究に便している。

この期において、西洋史讀書會は年年盛會に赴き、すでに二三回の大會を開したが、本會とともに「日本西洋史

學會」の發足が特記されねばならない。戰後わが國における斯學への關心の高まりを、綜合的な討論と研究の場にまでもたらそうとする試みは、西洋史學者すべてに共通する一つの理想であつたが、積年の割據主義は容易に打破しきれず、理想と現實の矛盾は消えなかつた。しかし本講座關係者が率先して示した大乘的な見地と、時宜を得た指導的方法によつて學會形成の氣運は急速に熟し、昭和二十五年本學における第一回日本西洋史學大會の開催とともに本會は發足した。以後毎年全國主要大學において回を重ねること六回、學會の形式も初期の公開講演一本から次第に細密な各個研究にわたり、わが國西洋史學の學問的發展と研究者相互の親和に稗益するところすこぶる大きいものがある。なお本學會に關連し、機關誌『西洋史學』も昭和二十三年創刊以來、すでに三十餘卷に及び、大會の報告を盛り、若き研究者を育て、海外の學界動向を紹介し、わが國唯一の西洋史學專門雜誌としての地歩を確立した。

戰後十年はまた卒業生の數においても空前の盛況をみた。それは若き世代における西洋文化と歷史への關心を物語るものであり、すでにその中には新制大學の教壇に立つ者もあり、また多くは高等學校教育の實地に就いた。前述したように學生の關心の所在が、主として社會經濟史にあつたことは、この期の大きな特徵となろうが、それが一つには戰爭という苛酷な現實に媒介された意識から出たものであつた限り、前期の高踏的歷史把握に對する一つの批判であり、學問の一つの深化を意味したことを否定できない。しかし學問は學問の遺產の上にこそ發展するものであり、また學問は批判が失なわれた時に化石化する。この意味でもこの十年の時の經過は、學問の上にも限りなく豐かな沃土を殘したものといえよう。

本講座は文科大學設立に遲れること一年、明治四十年五月史學科開設とともに創設された。當時東京帝國大學においては、地理學は史學科の補助科目に過ぎなかつたが、本學史學科開設に當り、地理學が獨立した一講座として認められたのは、開設委員であつた内田銀藏教授の卓見によるところが多い。すなわち内田教授は、歴史學の理解には地理學の知識が不可缺であるとの見解をもつていたからである。一方内田教授とともに史學科開設に參與し、本講座を擔當することに豫定されていた農商務省地質調査所の小川琢治技師は、間島地方地質調査に從事中のため發令が遲れたが、當時神戸高等商業學校にあつた石橋五郎教授が、明治四十年十月本學助教授を兼任して、文明地理學を講じ、ここに實質的に開講をみるようになつた。

小川教授

ついで四十一年五月小川琢治教授が來任、本講座を擔任することとなつた。小川教授は明治二十九年東京帝大地質學科を卒業後、地質調査所において地質調査に從事する間、「日本群島地質構造論」を世に問うた。從つて本學における講義も自然地理を主としたが、教授の漢籍に對する深い理解は、中國の歴史地理に關するすぐれた論著を生み出した。この傳統は本講座の特色として今日に至るもなお續き、毎年中國の歴史地理に關する講義が開かれている。また小川教授は聚落の發生的歴史的な解明に意を注ぎ、わが國においてその形態上特異な「越中礪波の散村」や「大和の環濠聚落」の起源を論じた。この問題はその後地理學者の多大な關心をひき、活潑な論爭を喚び起したが、問題を提起した教授の卓見は稱せられるべきである。また自然地理の分野では氷河の研究があり、その他刀劍の地理的考證、戰爭の地理的研究もあり、その自然・人文兩方面における深い洞察力と、和漢洋にわたる該博な識見を偲ばせている。

小川教授のもとに、石橋助教授は地理學史・人文地理學を講じ、また講讀を擔當、參考科目として醫科大學足立

文太郎教授が人類學を、喜田貞吉講師が日本歴史地理を講じた。また四十三年から大正元年にかけて石橋助教授は獨・英に留學、その間中目覺講師が經濟地理學・人文地理學を講じた。なお四十三年一月小川教授の發起で、「地理學談話會」が創設され、外國新刊書の紹介や研究發表を行なつてきた。談話會はその後現・舊教官、卒業生および專攻學生により組織され、親睦と研究の機關となり、一時「地理學研究會」と改稱されたが、ふたたび舊稱に復し時に活動の衰微したこともあつたが、會員の增加とともに盛況を取戻し今日に至つている。さらに大正四年には史學科卒業生などが中心となり、「史學地理學同攷會」が始められ、機關誌『歴史と地理』を發刊、廣く歴史・地理知識の普及に努めたが、これにも教室關係者の寄稿が數多くみられた。

石橋教授

大正八年九月石橋助教授は教授（兼任）に昇任したが、十年十二月小川教授が地質學鑛物學教室の創設に伴なつて理學部に轉じたため、石橋教授は翌年八月兼任を解かれ、本講座の運營に專念することとなつた。

このようにして小川教授は創設以來十四年間、本講座の充實と學生の指導に努め、その基礎を築いた。たとえば、本教室が所藏する和漢の古地圖は、質量ともにわが國有數のものであるが、その多くは教授の蒐集にかかり、また講座創設に際し、陸軍陸地測量部から寄贈された明治十年代發行の二萬分の一縮尺地形圖は、その一部を缺いてはいるが、今日他においてほとんど散佚しているので、貴重な資料となつている。さらに内田寛一助手は大正四年、第一次大戰によりわが國の統治するところとなつた南洋諸島に調査員として派遣され、多數の珍奇な土俗品を將來した。

なお小川教授在任中の卒業生は、明治四十三年にその最初を送つて以來、毎年一―三名ずつ計一三名に達した。その卒業論文の傾向としては、教授の學風を受け、中國や近畿諸地域の特性を歴史性を重視しながら、地人相關の

立場から論じたものが多かつた。

小川教授の後を承け、本講座を擔任した石橋教授は、開講當初から小川教授を助けて、主として人文地理學を講じたが、その間の主な論文には、「港灣の盛衰」（明四一）、「武庫地方聚落の變遷」（大三）などがあり、その時代變遷史的に地理をみるという立場はその後本講座の傳統となり、やがて「歴史地理學派」と稱されるに至つた。教授は最初ラッツェルの『人類地理學』に基いて講じたが、のち「我が地理學觀」（昭七）において、當時諸説の存した地理學の理論に對しその見解を披瀝した。教授の立場とする地人相關論とは、決して人類に對する自然の影響のみを過大に考えるものでなく、自然に對する人類の努力の解明を目的とするもので、その所説は歴史的要因が重要な役割を占め、時には歴史的説明が地人相關の解釋の大部を占めるとし、地人相關を基調とするいわゆる人文地理學こそ地理學の本體であると論じた。さらに地理學は地誌敍述の學か法則樹立を目標とする學かの問題に對しても、兩者の不可分を説いているが、この教授の地理學論は論旨明快で、その蘊蓄の深さを示している。

なお小川教授は、理學部に轉出後もつづけて自然地理學通論を講じたが、昭和五年六月停年退官した。退官に際し門下生が中心となり、記念論文集が獻呈されたが、それは史學・地理學・地質鑛物學の諸分野にわたる五十六篇の論文を收めた大册で、教授の學問の驚くべき幅廣さと、學德の偉大なことを物語つている。教授は退官後も、名譽教授の稱號を受け、大局的立場から本講座の發展を指導した。

小川教授退官後は、理學部の中村新太郎教授が自然地理學を擔當、また大正十四年からは小野鐵二講師が主として地圖學・地理學史を講じた。また、十五年からは小牧實繁講師が先史地理學・地誌學を講じ、のち昭和六年助教授に任ぜられた。この間小牧講師は昭和二年から二年間、小野講師は同四年から一年間、それぞれ歐洲諸國へ留學した。また本講座は、その性質上理學部地質學鑛物學教室と密接な關係を結び、昭和二年度には上治寅治郎講師、同三・四年度には春本篤夫講師が自然地理を講義し、また熊谷直一助教授が三年度に地圖學を講じたほか、專攻學

生で理學部地質學鑛物學の講義を聽講する者も多かつた。さらに昭和九年度には中央氣象臺岡田武松臺長がとくに來講して氣象學を講じ、ほかに國史學の喜田教授の「日本歴史地理」（昭七・八）、および東洋史學の宮崎市定助教授の「漢書地理志講讀」（昭八―一〇）が開かれ、副科目として醫學部清野謙次教授、同金關丈夫助教授が人類學を講じた。なお地理學の教育において重要な意義をもつ野外調査を目的とした巡檢旅行も、大正末年から春秋二回定期的に行われるようになり、昭和七年には遠く華北・滿洲にも赴いた。旅行は戰時中一時中斷されたが、なお今日も行われている。

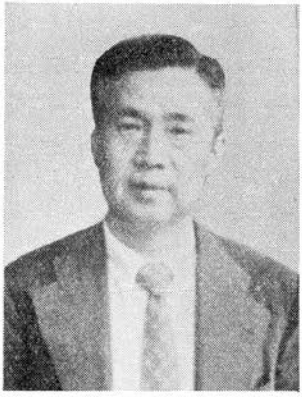
本講座關係の學會・出版物について述べれば、前述の「地理學談話會」の活動が活潑となり、昭和八年十二月には大毎會館で公開の大會を開催したが、以來毎年秋には大會を、また隨時例會を開いて研究報告・討論を行なうこととなつた。これよりさき、大正十三年小川、石橋、中村諸教授が中心となり、「地球學團」を創設し、雜誌『地球』を發刊、綜合的な地學の研究と普及に盡したが、同誌には本講座關係者の研究論文が多く掲載された。ついで昭和初期には、『世界地理風俗大系』、『日本地理風俗大系』、『日本地理大系』、『地理學講座』など、地理學の普及をめざした叢書が次次と發行されたが、これらは、小川、石橋兩教授の監修に負うところ大で、本講座關係者も多く執筆した。

しかしようやく本研究室講座自體の研究發表機關をもつことが要望され、ついに昭和七年『地理論叢』第一輯が發行され、前記石橋教授の「我が地理學觀」をもつてその卷頭を飾つた。『地理論叢』はその後も引き續き隨時刊行され、毎年の卒業論文や教室員の研究論文が掲載されるようになつて、その業績が廣く世に問われ、米國地理學會の機關誌 "Geographical Review" とも交換された。その他、小野講師は大正九年第一回國勢調査の結果を人口地理學的に研究し、郡市別および近畿地方市町村別人口密度を算出したが、これはのち公刊され好評を博した。この業績はその後も引きつがれ、小牧助教授らの『近畿地方人口增減圖』、『關東地方人口增減圖』が學術振興會の

補助を受け公刊された。

このようにして本講座は次第に發展して行つたが、石橋教授は大正末年から病を得、その後病臥すること多く、特殊講義・演習もしばしば自宅で行われた。しかしなお病床にあつてもよく研究の指導につとめ、地理學の發展に盡したが、昭和十一年一月停年となり退官、間もなく名譽教授の稱號を授與された。門下生一同は『地理論叢』第八輯をその還暦記念論文集として、論文三十二篇を教授に捧げ、その學恩に謝した。

石橋教授が本講座を擔當した大正十一年から昭和十一年に至る十五年間の卒業生は五七名に及び、ことに昭和に入つては、毎年五—一〇名の卒業生を送つたが、その大部分は教壇に立つて斯學を隆盛に導いた。この期の卒業論文の傾向は、ほとんどすべてが國内の特定地域を對象とした人口・歴史・聚落・經濟・交通の各分野にわたる研究で、資料を着實に積み上げ綿密に敍述する手法は、石橋教授の學風を遺憾なく繼承したものといえよう。



小牧教授

なお昭和五年には、本學とドイツの間に交換學生の協定が成立し、その最初のドイツ人留學生が本講座に學び、その後も二名の留學生を迎えたことは、斯學の國際交流の上から特記すべきであろう。

さて健康の勝れなかつた石橋教授を助けて來た小牧助教授は、同教授退官の後をうけ、昭和十三年三月教授に昇任、本講座を擔任することとなつた。ついで同年五月小牧教授は歐米に出張、アムステルダムで開催された國際地理學會議にわが國代表として出席した。教授は大正十一年の本學卒業で、その專攻は先史地理學であるが、昭和三年ケムブリッジで開かれた國際地理學會議に、「先史地理學研究の必要性について」と題し報告、また日本海砂丘地帶遺跡の先史地理學的研究は著名である。さらに昭和九年には帝國學士院から「日本に於ける石器時代海岸地域

の地理學的研究」に對して研究補助を與えられ、別に同八年には東照宮三百年祭記念會からの補助によつて米倉二郎助手とともに、近畿地方の歴史地理的研究に從事した。これら研究の成果は『先史地理學研究』(昭一二)として集大成され、これに對し十二年には文學博士の學位が授與されたが、その中で歴史地理學とは過去の任意の時の斷面における景觀の復原を使命とすると論じ、議論の多い歴史地理學の性格に一つの解答を與えている。その他教授の業績の主なものとして、わが國聚落の高距限界に關する研究などがあげられ、一方マルトンヌ、ヴァロー、ヘットナー、フリュールを始め、多くの海外碩學の論著を諸誌に紹介し、わが國の地理學界に裨益するところ大であつた。しかしやがて教授は日本地政學の樹立を志し、それは現狀を考究する存在の科學のみに終始せず、實現さるべき姿を考究する當爲の科學でなければならぬと說き、『日本地政學宣言』(昭一五)などを公にしたが、太平洋戰爭下時局の緊迫するにつれて、教授はこの立場を強く推進し、やがて特殊講義にも「日本地政學」(昭一六―一九)が講ぜられるようになつた。

この間、昭和十四年度からは中村教授に代つて理學部野澗隆治教授が自然地理學通論を擔當したほか、小野講師は十七年度まで引き續き來講し、主として地理學史・地圖學を講じ、また地理書講讀を擔當、さらに十六年以降はアメリカ地誌を講じた。なお十一年度には田中秀作講師が植民地理を、十三年度には藤田元春講師が日本歴史地理を、池邊展生講師が地形學を、翌十四年度には米倉二郎講師が聚落地理學をそれぞれ講じた。このほか十二年度には東洋史學と共通で、森鹿三講師が支那歴史地理研究法を講じた。さらに昭和十二年度から來講していた室賀信夫講師は、十八年十一月助教授に任ぜられ、特殊講義として政治地理學を行なうとともに、フランス地理書の講讀を擔當した。また野間三郎講師も、十六年以降地理學實習やドイツ地理書講讀を擔當、十七年度には川上健二、松井武敏兩講師が、十八年度には別技篤彦講師が地政學や地理學方法論を講じた。なお副科目としては金關丈夫講師が十六・十八年度人類學を講じた。

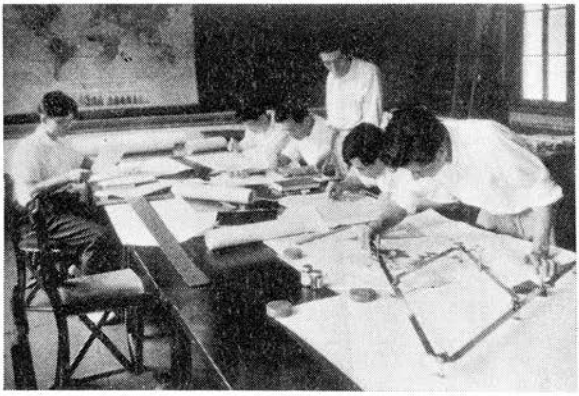
この期の出版物については、昭和十二・十三年の二回にわたり『地理論叢』とは別に『京都帝國大學文學部地理學研究報告』が出版され、當時研究室にあつた人びとの論文が發表された。『地理論叢』は引き續き從來通り刊行されていたが、戰時體制の強化に伴ない、昭和十八年第十三輯を最後に休刊のやむなきに至り、一方以前から本講座と關係の深かつた『歷史と地理』は昭和九年、『地球』は同十二年それぞれ廢刊した。

昭和十一年から二十年に至る間の卒業生は六一名に達し、卒業論文の傾向は、十四年ごろまでは從來の傾向を引繼ぎ、ただ人口に關する研究の多いことが注意された。これら卒業生はやはり多く教育界へ進出したが、大學院で研究を續ける者も多くなり、地理思想史や方法論、經濟地域の問題など、地理學の基礎的な分野を考究するようになつたが、その成果は前記『京都帝國大學文學部地理學研究報告』に發表された。ついで十五年以降の卒業論文は、前述のような小牧教授の影響をうけて、地政學的研究が壓倒的に多く、またアジア諸地域の民族問題や資源を論じたものも多數を占めた。

かくするうち終戰を迎えた本講座は、ここに一大轉換期に遭遇することとなつた。すなわち學生が戰陣から次次と復學しつつある間に、小牧教授は二十年十二月、室賀助教授、野間講師は翌年三月それぞれ職を辭し、ここに本講座は、全く專任の教官を缺くという事態に立ち至つた。そこで史學科では東洋史學講座の宮崎市定教授が本講座を兼擔、その中心となつて鋭意再建に當ることとなつた。すなわち二十一年度講義は、宮崎教授が中國地誌を、國史學の西田直二郎教授が歷史地理學を、考古學の梅原末治教授が日本先史地理學を、またさきに退官した野滿隆治名譽教授が講師となつて、自然地理學をそれぞれ講じ、新たに織田武雄講師が人文地理學の特殊講義を講じ、また演習も擔當して本講座再建を緒につかせた。しかし西田教授も間もなく二十一年七月退官、野滿講師また同年九月逝去し、重なる打擊を受けることとなつた。

このため二十一年後期からは、織田講師が講義（普通講義）として人文地理學概說を、理學部松下進教授が授業

擔當として自然地理學概說を講じ、ほかに新たに帷子二郎講師が研究（特殊講義）を擔當し、本講座は一應の建直しをみることとなつた。織田講師は二十二年三月助教授に任ぜられ、ついで二十五年十一月教授に昇任、以來本講座を擔任今日に至つている。織田教授は昭和七年本學を卒業、その後關西學院大學・立命館大學をへて、二十一年以降多難な本講座の再建に努力して來たが、講義としては概說のほか、地誌學や地理學史を講じ、他にドイツ地理書講讀や演習・實習などを擔當している。なお教授は二十六年二月から三か月間地理學の教育と研究狀況視察のため渡米した。



地理學實習

松下教授は引き續き二十七年度まで自然地理學・東亞地質構造論を擔當、帷子講師も地形學・文化地理學をつづいて講じている。さらに教養部の藤岡謙二郎教授は二十二年度講師となつて以後、毎年景觀變遷史的立場から先史地理・歷史地理・都市地理を講じ、地誌の講讀・演習、および大學院演習をも擔當している。その他、喜多村俊夫講師は二十三、四年度、村松繁樹講師は二十五年度以降、山口平四郎講師は三十年度、野間三郎講師は三十一年度、それぞれ主として農業地理・聚落地理・交通地理・地域論などの講義を行ない、また教養部西村睦男助教授は二十六年度から經濟地理學を講じ、地誌講讀を擔當している。中國關係地理の研究・演習は、二十五年前期までは宮崎教授が繼續擔當したが、その後は那波利貞教授、および人文科學研究所森鹿三教授、同日比野丈夫講師が相ついで擔當、小野三正講師は引き續き地圖學および製圖法を指導した。また戰前（大一五—昭五）戰後（昭二一—二九）の二期にわたり本講座の運營を輔佐して來た吉田敬市助手は二十二年度から

實習のほか條里の研究や水産地理學を講じて來たが、二十九年五月多年の研究成果である「朝鮮水産業開發過程の地理學的研究」に對し、文學博士の學位を授與され、間もなく長崎大學教授に轉出した。

關係學會としては、昭和二十一年十月廣く關西在住の地理學徒によびかけ、「西日本地理學會」が結成され、その後二十三年六月同會は發展的解消をとげ、「人文地理學會」が創設された。この會は事務所を本教室内におき、帷子講師・織田教授が會長を歴任、機關誌『人文地理』(最初は季刊・二十五年から隔月刊)を發行し、次第に會員數を增加し、全國的な學會に發展している。隔月に例會を開いて研究發表討論を行ない、秋の大會における研究發表者は例年約五〇名を數え、全國各地から參加する會員は三〇〇名にも達している。また本學會は内外の諸學會とも交流を重ね、『人文地理』と交換の學術雜誌は國外三二種、國内四三種に達し、今やわが國の代表的學會として國際的にも評價されて來ている。「地理學談話會」は、從來通り隨時例會や、新專攻生歡迎會・卒業生豫餞會を開くほか、毎年秋人文地理學會大會と前後して大會を開催し、研究討論と同窓の親睦を圖つている。

つぎに最近の研究業績としては、昭和二十四年度から三年間文部省科學研究費を交附され、織田教授以下教室關係者が湖東平野南部の綜合的地域調査を行ない、戰後盛んになつた共同調査の地理學における先驅として注目された。その後は國史學教室と共同で、近畿地方村落の綜合的研究に從事し、教養部地理學教室と協調した京都・大阪の近郊山村や、櫛田川・紀の川流域の歴史地理的調査にも參加、着着その成果をあげている。

戰後の卒業生は、舊制・新制を併せて五六名を數え、卒業論文は人文地理學の各分野にわたつているが、經濟地誌を扱つたものが比較的多く、また社會經濟史學や文化人類學の方法を導入した論文の見受けられることも戰後の特色である。また卒業生は從前通り教育界に進出し、あるいは大學院で研修する者も多いが、實業界や新聞界に就職する者も見られ、これも戰後の特徴といえよう。

考古學講座

考古學講座の設置は史學科のうちではもつとも遲い大正五年九月で、專攻科目となつたのは同十五年四月からである。しかしこのわが國の大學における最初の講座設置は陳列館の設備とともに史學科開設當初からすでに企畫されていた。すなわち史學科の置かれた翌々明治四十二年九月、將來の擔任者として濱田耕作が講師に依囑され、哲學科で日本美術史を講義するかたわら、關係標本の蒐集に着手、翌年度からは史學科學生のために「考古學概論」の講義を始めたが、標本の蒐集はこの學問の基本である遺跡の學術調査と表裏する立場をとつて發足した。濱田講師は四十三年秋、狩野、內藤、小川諸教授の北シナにおける燉煌出土古文獻の調査に同行、河南洛陽および南滿洲をも視察して關係資料の蒐集を行ない、早くもその學の範圍を東亞全般に及ぼす傾向を示した。さらに四十五年初夏には、南滿洲に出張、刀家屯・營城子などで學術發掘を行ない、また大正元年末の宮崎縣西都原における、いわばわが國最初の組織的な古墳發掘にも參加し、研究方面で見るべき成果をあげた。ついで濱田講師は大正二年三月助教授となつて歐洲留學の途についたが、その間新たに講師を依囑された今西龍は關係資料の蒐集整理に當り、それらは大正三年七月一部工事の竣功した文科大學陳列館に移されて、新しい三つの陳列室と研究室が設けられ、また島田貞彥、梅原末治が相前後して教室員に加わり、ここに教室の體制は整えられた。そのうちに濱田助教授は、主に英・佛・伊に三年間滯在の後大正五年に歸國した。かくてその九月講座の開設をみることとなり、翌年九月には擔當の教授に任ぜられた。

濱田教授は滯歐の間、主としてロンドン大學ペトリー教授のもとでその實踐的な學風に親炙し、またイタリア・ギリシアの古典考古學の實際をも視察したが、わが國における最初の考古學講座を擔當するに當つては、從來の古

物偏重の風を排して考古學の基本としての遺跡の科學的發掘に重點を置き、廣い視野から考察を行なう立場をとつた。從つて講義として史學科學生一般に毎年「通論考古學」を講ずるとともに、大正七年には「古代東方國民の文化」と「東洋考古學」を講述、その後者は「希臘羅馬考古學」とともにその後二年間續けられ、實習も始められた。なお、これらに先立つ大正六年春オックスフォード大學のセイス教授が來朝した際、その十月に教授の專攻である「Sumerian Script and Language」の六回にわたる特別講義が行われた。濱田教授の特殊講義はその後「支那考古學」のほかに、「伊太利考古學—特にエトルスクの文化」、「日本考古學」、「古代土器の研究」など廣い分野にわたつて行われ、その學問の實際が說述された。

また研究方面では遺跡の實地調査とその研究報告の刊行に力が盡され、その範圍も狹い國內に限らず、廣く東亞全域に及ぼすという方針がとられた。大正六年三月刊行の『九州に於ける裝飾ある古墳』を第一册として、その年發掘調査の結果を錄した第二册の『河內國府石器時代遺跡發掘報告』以下、年を追うて册を重ねた『考古學研究報告書』はその成果を示すものである。そして研究の範圍についても、大正七年から濱田教授は梅原教室員とともに朝鮮總督府の古蹟調査事業に關係し、また十四年以降は滿洲・シナ史蹟の調査機關となつた東亞考古學會の設立にも主動となるなど、當初の方針は着着實行にうつされ、考古學標本の增加と相まつて實質的に充實されて來た。かくて大學における考古學の位置が高まつた結果、大正十五年四月に至つて史學科の專攻科目となり、從來の普通講義「通論考古學」、特殊講義「日本考古學」、「羅馬考古學」のほかに、演習・實習のコースも始められ、翌年度に入つては四名の專攻生を迎えることとなつたのである。

昭和二年秋濱田教授は六か月の歐米視察に出張し、この間原田淑人講師が來講した。その後昭和四年濱田教授設計の第三次增築工事によつて陳列館が完成し、四月には陳列室がその階下に移つて、新たに教授室・圖書室・實習室をもつ一講座としての外容を整えた。加えて大正十四年以來文部省在外研究員として、英・佛・獨・米・瑞典・

ソ連などの諸國で考古學を研究していた梅原助手が同月に歸國して講師となり、「支那考古學」を講ずるほか、實習をも擔當、內容の上でも充實をみた。その後昭和七年には研究室の發展に寄與した島田助手が關東廳博物館主事に轉出したが、講師を兼ねて翌年度「滿洲考古學」を講じ、同年六月には梅原講師が助教授に任ぜられ、六年度には岡島誠太郎講師が「古代埃及史」を、十二年度には水野清一講師が新たに「支那漢六朝の考古學」を講述し、いよいよ完全講座としての實を備えた。

つぎに研究方面では、大正中期各地で發掘調査の行われた史前遺跡について、大正九年に『河內國府石器時代遺跡第二回發掘報告』と『肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚發掘報告』の研究報告二冊、十年には『薩摩出水貝塚と指宿の包含層の調査報告』を刊行して、その分野の研究に指針を與えたのをはじめ、十二年には相ついで『切支丹關係の資料に關する研究』、『近江國高島郡水尾村鴨の古墳』、十四年には『豐後磨崖石佛の研究』、昭和二年には『出雲に於ける上代玉作の遺物と遺跡の研究』をそれぞれ公刊して日本考古學のあらゆる面についての成果を錄した。この研究はその後も引きつづき、五年には梅原、島田兩教室員の『筑前須玖史前遺跡の研究』、八年には梅原助教授の『讃岐高松石淸尾山石塚の研究』が、また九年には『新羅古瓦の研究』、十二年には『大和島庄石舞臺の巨石古墳』という濱田教授の研究が刊行された。

以上のような教室が主體となつての調査研究のほかに、國內では地方史蹟の調査、すなわち京都・大阪・兵庫・鳥取・熊本等各府縣の考古學上の分野が教室員によつて行われ、それぞれ成果をあげた。ことに京都府は本學にその事業を依託し、考古學の分野は濱田教授指導のもとに梅原囑託がこれに當り、鳥取縣の調査とともに學界に大きな寄與をなしたが、その成果は、大正八年第一冊を出してから昭和十五年の第二十冊まで續いた『京都府史蹟勝地調査報告書』と、『鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡』（大一一）、『因伯二國に於ける古墳の調査』（大一三）に示されている。なお昭和十年設けられた日本古文化研究所の「近畿地方の古墳墓の調査」が、梅原助教授をはじめ

教室員によつて行われ、前後三册の報告書に見られるような成果をあげたことも、その業績として記すべきであろう。

また大陸方面では朝鮮總督府の依囑によるものとして、大正九年の南鮮金海貝塚の發掘、十年秋偶然見出された慶州金冠塚出土品の調査研究、さらに十三年の同地金鈴・飾履兩古墳の發掘などにおいて大きな成果をあげ、その間南鮮の漢代遺跡の調査を行ない新分野を開いた。そして昭和になり朝鮮古蹟研究會が設立されるに當り、濱田教授梅原助教授がその主動的位置につき、七年以降樂浪地區での發掘に從事した業績は總督府公刊の調査報告に明示されている。さらに南滿洲においても、東亞考古學會の調査事業中、濱田教授を中心とし教室員などによつてなされたものに、大正十五年の貔子窩の史前遺跡をはじめ、昭和四年の南山裡の漢代塼墓の調査、およびその後の營城子の壁畫古墳の研究などがあり、それぞれの浩瀚な報告書に見るような成果を收め、東亞考古學の發達に寄與した。そしてその調査は滿洲國の成立とともにその地域にも延び、『通溝』、『赤峯紅山後』はその業績の一部である。

考古學資料については、右のような廣般な研究調査と連關して、もつとも價値高い標本が自ら蒐集增加された以外に、當初の方針による陳列館の經營と相應じて、進んで中國の出土品から、近東・歐洲・南米にわたる關係遺品の蒐集がなされた。この點で早くペトリー教授主宰の「埃及發掘財團」に資金を送つて、學術調査による確實な遺品の分讓を受けたこと、およびボール博士はじめ西歐學者の好意によつて西亞楔形文書や舊石器時代遺物の加わつたことなどは忘れられないが、また中國の古代遺物についても、內は內藤、小川、羽田諸教授の助成により、外は羅振玉、岡崎藤吉その他多くの人びとの寄附によつて夥しい增加を見ることになつた。かくて大正十一年にはこれら蒐集品についての最初の『考古圖錄』が刊行され、引き續き十四年には『支那古明器泥像圖說』が出版された。これら蒐集品の圖錄は、陳列品の增加に伴なつて昭和五年に增補され、さらに十年になつてその後の新標本のみを集錄した續編が刊行された。このようにして收藏品は洋の東西にわたつて無慮萬に上り、東亞におけるもつとも特

色ある蒐儲として內外に知られるに至つた。

ところが昭和十二年六月、濱田教授は本學總長となつて教授の地位を去つたので、東洋史學の羽田亨教授が一時研究室の管理に當り、醫學部清野謙次教授が講讀を擔當するなど臨時の處置がとられたが、翌年度からは梅原助教授が普通講義としての「考古學概論」以下、特殊講義・演習・實習・講讀を受け持ち、十四年度からは水野講師のほかに新たに村田數之亮講師に西洋古典學の講義を依賴して體制が整えられた。ついで同年七月に梅原助教授は教授に進み、本講座を擔任することとなつた。梅原教授の特殊講義は「日本出土の古鏡の研究」(昭一四)、「樂浪の文化」(昭一五)、「殷代の文化」(昭一六)、「外蒙古の漢代遺物の研究」(昭一七前)、「日本考古學の諸問題」(昭一七後・一八)、「本邦上代古墓制の研究」(昭一九)と、それぞれの題目に關する實地についての調査を經とし、既往の研究を緯とした綜合的なものが續けられ、これらが村田講師のクリート文化、希臘古典考古學・美術に關する講義、水野講師の「支那考古學」、ことに漢六朝の金石に關する年を重ねての特殊講義と相並んで講授され、さらに十七年度には貝塚茂樹講師の「支那の甲骨金文」に關する特殊講義が行われた。演習は毎年「東亞考古學の諸問題」として重要な問題がそれぞれ取り上げられ、また講讀は前者と並んで、歐洲・近東・印度などの考古學の發達を記述したカッソンの "Progress of Archaeology" その他の英書について行われ、實習では研究と並行して考古學における重要な野外の調査作業に對する指導を含め、しかもその範圍は國內のみならず、朝鮮・南滿洲にまで擴げて實施された。

梅原教授

つぎに研究面では、引き續き朝鮮半島の古蹟調査に關與したほか、新たに昭和十三、四年には教室員が主となつて南京に遺留の夥しい中國の考古學資料の整理研究に從つた。さらに十五年に日本學術振興會に東亞古代遺跡調査

の特別小委員會が設けられるや、梅原教授はその主任となつて研究室員とともに終戰時まで主要な一半の調査を擔當した。この調査は十五年春の關東州長山列島上馬石貝塚の發掘、翌年の營城子四平山と旅順老鐵山の石塚群の發掘調査、引き續き十八年の右の石塚と連關した住居址の調査とそれぞれ見るべき成果を收めたが、ことに四平山石塚の調査において著しいものがあつた。この間梅原教授は十六年秋、日・佛印交換教授として、翌年にわたつて佛領印度支那各地で東亞考古學を講ずるとともに、東京・安南北部の漢代遺跡遺物の調査をも行なつた。

豐中陶棺古墳における考古學發掘調査　（大正十三年）

このようにして創設當初からの東亞考古學に關する調査研究活動が、よく本邦での中心的位置を占めた結果、關係資料および研究成果に著しいものが見られるに至つたので、從來の國內の成果を中心とした研究報告と並んで、新しく「考古學資料叢刊」の出版が企畫された。そしてその第一册として十八年三月に『漢三國紀年鏡圖說』、同十月に『支那漢代紀年銘漆器圖說』翌年には『唐鏡大觀』と巨册が相ついで出版され、それぞれ既往の基本資料の集成と、それらに基く研究の成果が示されたが、第四册『支那古玉圖錄』印刷中に終戰となつた。他方研究報告は十五年三月に『筑前國嘉穗郡王塚裝飾古墳』を、また十八年三月に『大和唐古彌生式遺跡の研究』をそれぞれ刊行した。小林行雄、藤岡謙二郎、末永雅雄三研究室員の手になる後者は、わが國彌生式土器の研究に一基準を打立てたものである。

これらの出版と並んで、國内では十五年冬の筑前における石人石馬表飾古墳の調査をはじめ、近畿地方では十七年六月の山城寺戸大塚古墳、十八年二月の同八幡石不動古墳の調査、および河内澤田長持山古墳の再査、伊賀名賀郡での古墳の地域調査などが、鳥取縣下における古寺阯のそれとともにあげられるが、さらに十八、九年度には有名な肥後江田船山古墳、同免田古墳の調査や、薩摩櫻島遺跡の發掘調査を行なつて、それぞれ成果を收めた。そしてこの國内での活動は、苛烈な戰爭の末期である十九年から二十年春においても、大隅半島や日向の持田村古墳群の調査として續けられた。

太平洋戰爭末期に一時中止されていた講義は、昭和二十一年度から再開されるとともに、それまで戰爭下に續けられた研究調査も非常な困難を冒して同時に始められた。その一つは伊賀夏見廢寺阯の調査であるが、それは翌年度に大きな成果をあげた。二十二年度にはさらに大阪府との協力による攝津三島郡宿久庄紫金山古墳の發掘調査、および山城妙見山古墳・和泉七觀古墳・松江市外金崎古墳などの發掘調査を行ない、それぞれ新たに道の開かれたわが國での古墳調査研究に、一つの基準を示す結果をもたらし得た。翻つて講座は梅原教授、水野、村田兩講師によつて講義・研究・演習・實習が舊に復して行われたが、二十二年度には梅原教授は、さらに國史專攻學生のために「日本國家成立の考古學的考察」という講義を行ない、また法隆寺の國寶修理について種種の新見解を得た淺野清を講師に依囑し、前後七回にわたる「法隆寺の建築」についての講義を聽いた。これはのちに淺野講師の校訂を經て、『法隆寺建築綜觀』と題し、二十八年九月本研究室考古學叢書の第一册として刊行され學界に寄與した。二十三年度からは村田講師が新たに演習としてドイツ語の考古學書の講讀を行ない、また小林助手が實習をも擔當、翌年度には一時講義の一部をも分擔した。研究面では、二十三年一月から三月にわたり近江大津滋賀の史前遺跡を調査したほか、新しく結成を見た日本考古學協會の主要な研究事業の一つである古墳墓調査を梅原教授以下教室員が主として擔當した。梅原教授は工學部の高橋逸夫教授と協力の上、世界最大の墳墓といわれる應神・仁德・履仲

三帝陵の營造に關する基礎的な調査に從事し、小林助手は筑前糸島郡一貴山古墳の發掘調査を行なつた。

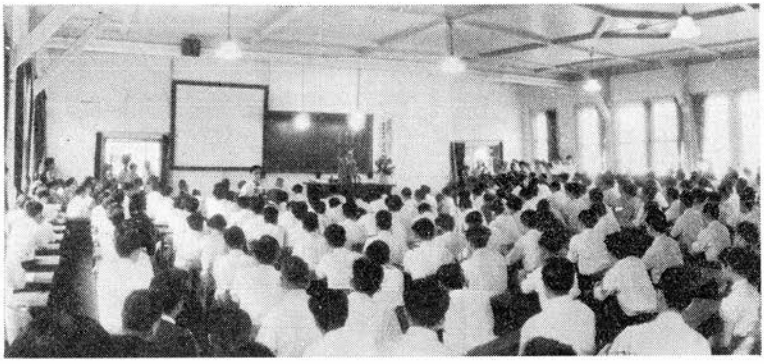
昭和二十五年三月有光教一は專任講師となつて、「朝鮮史前の研究」とともに演習として英書の講讀を行ない、水野講師は中國の考古學書を講讀、村田講師は研究として「希臘の壺」を講じた。九月有光講師はカリフォルニア大學の招聘に應じて、日本および朝鮮學の講義のために渡米したので、二十六年度は人文地理學授業擔當の藤岡謙二郎教授の「日本先史地誌」を共通講義として加えた。研究分野では二十五年度から小林助手が主となつて伊賀名賀郡才良の石山古墳の發掘調査に着手、それは三年間繼續したが、わが國古墳調査の上に畫期的な成果をあげた。

二十六年度からは新しい學制が學部にも實施された結果、從來の考古學はBコースとして教養部において習得し、學部では研究・演習を主とするように改正された。この年梅原教授は研究として「東亞文明の黎明」、また演習で「考古學の諸問題」を取り扱い、水野講師の「中國考古學」と村田講師のドイツ語考古學書の講讀が行われた。二十七年度には、久しく講師として古典考古學の分野で研究と演習を擔當して來た村田講師が、大阪大學教授としての本務の關係から辭任したので、新たに人文科學研究所の長廣敏雄教授にドイツ語の考古學書の講讀を主とした授業擔當を依囑した。同年九月有光講師は二か年にわたるアメリカでの講義を終えて歸任し、研究「朝鮮史前の研究」とともに英語の考古學書の演習を行なつたが、別に新制度の下に史學科共通として樋口隆康講師が佛語による考古學書の講讀を始めたのと相俟つて、講讀に一重點を置いて考古學の廣い視野を與える新しい講座の方針が整えられた。他方この年の研究は、梅原教授の「鏡鑑の研究」が、わが國で組織づけられたその成果を說き、有光講師の講義また既往のそれを總括したそれぞれ特色あるものであつた。この年十二月有光講師は助教授に任じ、また昭和十年以來助手として研究に從事して來た小林行雄が翌年四月專任講師となつて、本講座は教授・助教授・專任講師を持つという充實ぶりを示し、人文科學研究所の水野、長廣兩教授また授業擔當をなし、二十八年度から開設された大學院文學研究科の考古學科は全國でもつとも整つたものとして設置されたのである。

ついで全く新制度となつた二十八年度の講義は、研究として梅原教授、有光助教授ともに前年度のそれを承けたほか、新しく小林講師が「日本古墳墓の研究」を開講、次年度にもつづいた。實習・演習は前年度のものに加え、梅原教授が「近時の考古學上の諸問題」をとりあげて學生の研究に資したが、さらに大學院研究科では「東亜古代文明の研究」を講じた。梅原教授は、同年九月パリで開かれた國際東洋學者連盟の第一回總會に日本代表として出席、その後佛・英・米などに六か月間滞在して、中國考古學ことに古銅器の調査に從事した。二十九年以後の學部における研究・演習は、研究では梅原教授が中國、有光助教授が朝鮮、小林講師が日本をそれぞれ擔當、廣い東亜考古學の立場からする方針に基いてそれに演習を加え、大學院においては梅原教授は「殷代の文物」、「戰國時代の文化」について、近時の所見による獨自の研究を講じた。ことに三十年度には大學院學生のために人文科學研究所の貝塚茂樹教授に「甲骨文金文の研究」の講義を依囑し、梅原教授の演習と併せてそのコースを整えた。

この間研究面では、二十六年三月および十月に讃岐において二基の古式古墳の發掘調査を行ない、その一つ讃岐津田岩崎山古墳では、古式古墳の構造を示す上に好果を收めたのを始め、京都府下遺跡の調査にも從事、二十八年には乙訓郡長野新田の一古墳の石棺を陳列館に移置し、翌年には鐵道工事中偶然三〇面に上る多くの古鏡を出土した相樂郡椿井大塚古墳の調査を行ない、また同年大阪府の依囑により小林講師が主となつて攝津豐川村南塚古墳を調査し、それぞれ重要な成果をあげた。つぎに長らく中絶していた研究成果の發表についても、三十年八月考古學資料叢刊第四册として『支那古玉圖錄』の巨册が刊行されたのにつづき、戰時中および終戰後調査された京都府下古墳墓の調査成果が京都府から刊行され、研究報告も第十七册として右の『讃岐に於ける古墳の調査研究』の印行が計畫され、引き續き續刊のはこびとなつた。

なおこれらとともに、二十八年秋から始められたロックフェラー財團の助成による梅原教授蒐集の朝鮮考古學關係資料の整理と、その複本作製の事業も特記すべきである。無慮萬を超える過去三十年間にわたる同教授の關係記



梅原教授退官公開講義

錄・寫眞・拓影の類は、不幸な半島の動亂のため、朝鮮の博物館における資料が散佚した結果、もつとも重要な基本資料となり、そこでこの事業が有光助教授を中心に行われることになつたもので、三年間に正本のほかに作られた複本三部が、日本・朝鮮・アメリカなどにそれぞれ保存され、研究に利用し得ることとなつたのは本研究室の大きな業績というべきである。さらに關係遺品の蒐集では、戰時中から戰後にわたる研究室の活潑な調査研究と卽應して、とくに考古學上もつとも重要な遺跡と結びついた一括遺品の夥しい增加が見られる。これらの中で戰時中得た南滿洲四平山石塚出土品は、各種の玉器と黑陶とを主とし、その後者は東亞におけるもつとも豐富なものとして、坪井清足、國分直一蒐集寄與になる臺灣の史前彩文土器片とともに、世界的な資料と稱すべきである。また國內にあつても攝津宿久庄紫金山古墳・伊賀才良石山古墳・同夏見廢寺・近江滋賀里史前遺跡出土品などがあげられる。これら新資料は二十六年三月に刊行された『考古圖錄新輯』に收錄され、また現實には新たに博物館施設として、三十年二月認定された文學部陳列館の主要な部分を占め、いよいよ東亞に比類ない豐富なものとしてその聲價を高めつつある。

なおこの講座に關連するものとして、「考古學談話會」について附記しておこう。この會は講座が專攻科目となつて專攻學生を迎えた年から發足したが、教官・學生・卒業生をメンバーとし、毎學期一、二回の集會には、

會員が調査や研究について語り合い、また實地の見學をも行ない、稀には外客を迎えてその講話なども聽いた。昭和十一年夏ハーバード燕京研究所のエリセーフ教授の來朝に當り、長沙の古墓についての話を聽いたごときはその一例である。ところが戰後二十二年十月に新たに結成された「考古學教室友の會」をその外郭團體とするに至つて、公の學術團體に發展、毎年一回の總會に當つては關係資料の展觀をも行なうこととなつて、現在に及んでいる。

さて三十一年八月、梅原教授は停年に達して退官した。大正三年七月以來、實に四十二年を超える長い勤續であつてその間、考古學研究室の發展と考古學關係講座の充實とに盡した功績は大きく、學生を薫育し學界に寄與した業績は著しい。教授は六月二十八日、文學部第一教室において、最終講義を公開講義として行なつたが、學の内外から多くの來聽者があり、たちまち同教室は滿員の盛況となり、ついに入室できなかつたものが少なくなく、教授の學德の程を偲ばせる盛大さであつた。